

71
543

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{16m} 1 2 3 4 5

始



71-543

目と耳と口
 著波小谷巖

小大
 精作

大正
 5. 2. 22
 内交

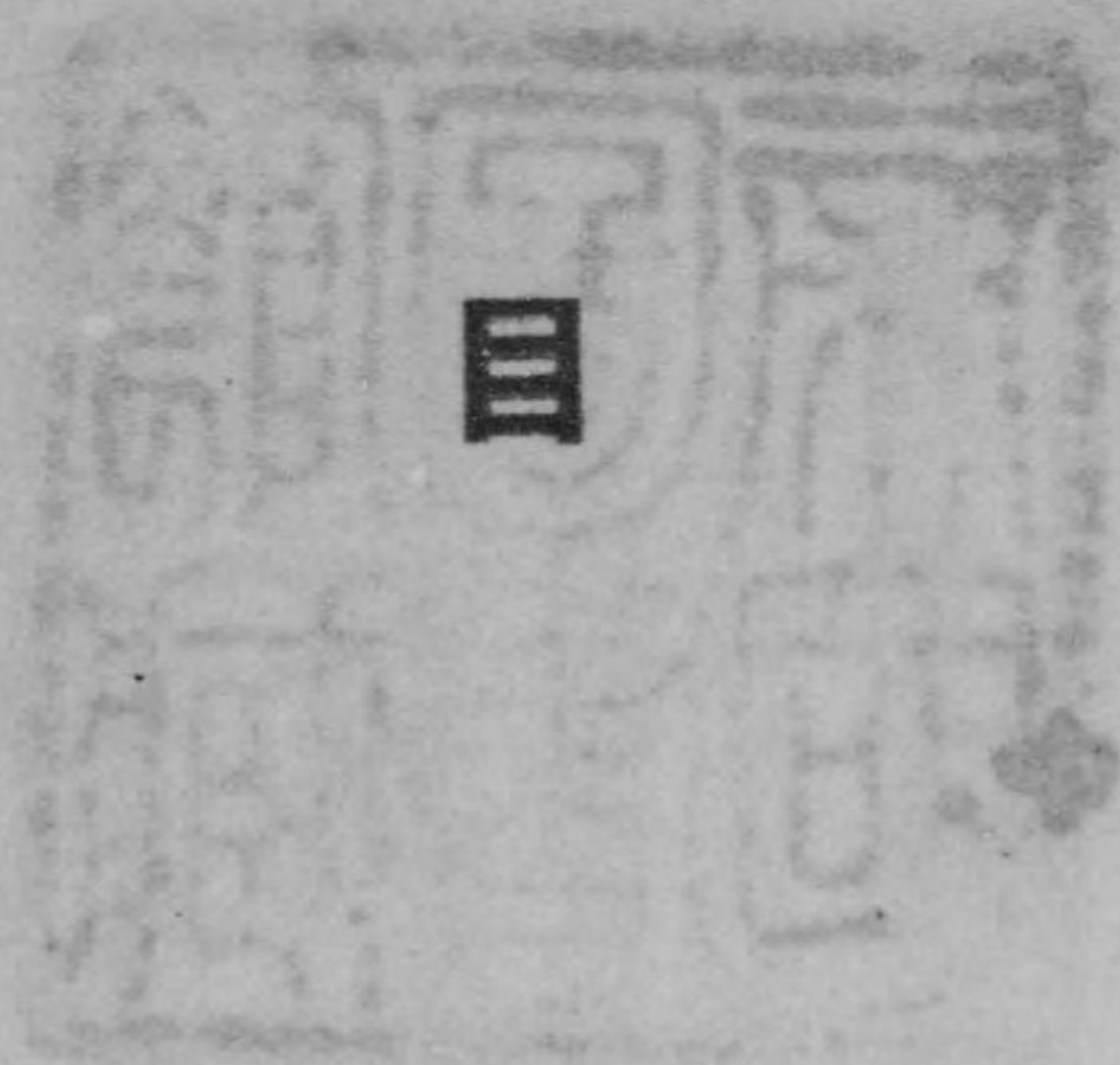


ハシガキ

目は見たまゝを、耳は聞いたまゝを、口は
云ひたいまゝを、それ／＼手に運ばせたら、
こんな物が出来てしまった。それで少しは
猿とちがふつもり。

著者

目 次		目
満鮮いろは噺	一	一
薪の一泊	四四	四四
寢覺の床	五六	五六
熊野路の二日	六四	六四
東北瞥見記	七八	七八
足尾のぞき	八三	八三
人見る旅	八八	八八
命拾ひの記	一〇六	一〇六
新質業團語	一一八	一一八
明三稻荷初午祭	一二二	一二二
旅のいろく	一四〇	一四〇
「思ひ出」の思ひ出	一四七	一四七
時計の行方	一五六	一五六
耳		
按摩物語	一六一	一六一
また按摩物語	一七八	一七八
半獸時代の文明人	一九〇	一九〇
二百年前の奇婚雜例	一九八	一九八
ベル物語	二〇八	二〇八
口		
乃木さんと死神	二一九	二一九
あ、此神經衰弱同	二二八	二二八
住道樂	二三九	二三九
偽善主義	二四五	二四五
何うく問答	二五六	二五六
左様なら	二六四	二六四
瀬戸内海論	二八七	二八七
制札文學	二九九	二九九
制服美術	三〇四	三〇四
吾輩は大禮服である	三〇八	三〇八
見物小言	三一二	三一二
魂迎へず	三一五	三一五
紅葉君と語る	三一九	三一九
人間學	三三二	三三二
賣文の辭	三四一	三四一

A large, faint grid or table structure is visible on the right page. It consists of approximately 10 columns and 10 rows, forming a large rectangular frame. The content within the grid is extremely faint and illegible, appearing as light gray lines and shapes.



滿鮮いろいろは噺

一ヶ月と十一日

噺いろいろ鮮



明治四十四年來の宿題であつた、僕の滿洲朝鮮行は、漸く大正二年の秋になつて果たされた。東京を立つたのが九月廿五日で、再び東京に歸つたのが、十一月の五日であつたから、其日数を算へると、丁度一ヶ月と十一日になる。

其間に廻つた場所が、滿洲で十七ヶ所、朝鮮で九ヶ所、序に北清で北京天津の二ヶ所、計二十八ヶ所に及んで、演壇に上つた数が、總計で七十一回、話題を改めた数が都合三十と七種。その短いのが二十分、長いのが一時間半と云ふ事になる。

茲にお土産のいろいろは噺を書くに當つて、いの一冊に其統計を擧げて置く。

る 露西亞の足跡

滿洲は云ふまでもない、この十年前までは、露西亞人の勝手に横行して居た所だ。それを三十七八年戦役に、明治天皇陛下の稜威の力で、遂に我方へ譲り取つたのである。

それ以來我日本の手で、新たに經營を初めたのだが、元より露西亞の足跡は、まだ方々に残つて居る。

その足を十二文とすれば、我が足は漸く十文位だ。まだこんな小さな足では、折角残して行つてくれた靴も、思ふ様に穿きこなせぬと云つた様な仕末。

それにつけても我々は、もつと大きくならなければならぬ、もつと強くならなければならぬ。さもなければやア折角滿洲を取つても、却つて大きな履物に蹴躓いて、飛んだ物笑にならぬとも限らない。

は 白塔下の小學校

遼陽は當年大合戦のあつた所だ。その附近の首山堡は、有名な軍神橋中佐が畏くも明治の皇太子殿下、即ち大正天皇の御誕辰に當つて、花々しい戦死を遂げた所だ。僕が其跡を弔ふべく、首山の頂に登つたのは、十月七日の事であつた。

其時は守備隊司令部から、わざ／＼櫻井副官が同行して、僕等の爲めに當時の戦況を、委しく語つてくれたのである。

其話によると、當時の我軍の砲弾は、残念ながら力が弱くて、遼陽の敵陣までは、何うしても届かなかつたものださうだ。

が、それが却つて幸福になつて、當時唯一の目標になつて居た、例の有名な白塔は、今も巍然として遼陽の町を飾り、そして其下に設けられた、我が附屬地の小學校を、永く守り顔に立つて居る。

に
爾靈山の野菊

爾靈山と云へば、誰も知らない者はない、我軍苦戦の記念地である。

その山の頂には、銃弾形の銅の記念柱が、天を衝く様に立つて居るが、それに題した爾靈山の三文字は乃木大将の筆である。此山に上つて、此柱に對する者、誰か襟を正し、帽を脱せず居られやう。

然るに僕の上つた時は、(十月三日)天氣は暗れて居たけれども、非常な烈風の日に吹いた、折角正した襟も、風の爲めに引き剥がれ、取つた帽子も風の爲めにやともすればむしり取られさうになる。

其中には今を盛りと咲き亂れた野菊が、山の半腹から頂へかけて、さながら波の打ちあける様に、風に揺られて狂ひ立つ態は、宛然當年の決死隊が、此所に突貫する姿とも見えて、しばらくも亦勇ましく感じた。

ほ
星ヶ浦の絶景

星ヶ浦とは名から床しいではないか。これは大連から遠からぬ、沙河口の工場に近い、海岸の一部を云ふのである。

元は黒石礁と云つて、旅順攻撃の時分には、此邊にも水雷が流れて來、又流弾も落ちた事がある所だ。それが今は、避寒避暑の遊場所となつて、景色もよければ、設備も整ひ、ハイカラ式のホテルもあれば、大和ぶりの貸別荘もあり、芝の園生には蝶を追ふべく、萩の垣根には蟲を樂しむべく、若し夫れ夏は海水に浴し砂濱に戯れて、確に氣を養ひ、身を鍛へるの地に適して居る。

聞けば此所を星ヶ浦とは、前の關東都督大島大将が、木戸理學士(解劍子)の説を入れて、新たに命名されたのだと云ふ。木戸君は僕の友人、木戸公の遺子の一入であるのだ。

へ 北京の自動車

北京は只た一日半の滞在だった。世界的の大都會を、これ許りの時間で何う見物が出来やう。

所が其所のやまと俱樂部で、居留人の家族の爲めに、一晚講演をやつた報酬として、翌一日の見物には、自動車一臺をあてがはれたので、大いに要領を得る事が出来た。

有名な萬壽山の離宮、動植物園から天壇まで、その自動車で乗りまはしたが、其路程凡て五六十哩、随分狭い小路へも割り込み、雑鬧の中を押し廻つたのに、少しも事故の無かつたのは、支那人の運轉手、大いに侮る可らずと思つた。

殊に面白かつたのは、途中で行先の解らない時は、一々人に尋ねる代りに、路傍に遊んで居る子供をば、適宜に一人車の端にのせて、これに案内させた事だ。パイロット（水先案内）と云ふものは、強ち水上には限らない。

と 湯崗子の温泉

海城から遼陽へ向ふ間に、湯崗子と云ふ温泉場がある。昔唐の太宗が、遠征の途中に、入浴したと云ふ、傳説さへ残つて居り、現に三十七八年戦役には、露路軍が療養所を設けて居たと云ふ所だ。

其療養所の残物を、其儘日本風に造作して、近來新たに開いたのが、清林館と云ふ温泉宿だ。極めて清らかな浴室の側には、特に温室を設けてあつて、こんな地方では見られない植物が、此所に澤山集めて在り、客室も綺麗なら、遊戯室も立派に出来、内地の温泉場には多く見られない程、萬事がよく行届いて居る。

惜いかなその近所に、これと云ふ名所もないが、それでも駱駝に似た鞍山や、錦を見る様な千山の頂は、朝夕眺め得るのである。

ち 地獄の門口

滿洲に撫順の炭坑のある事は、世界でも今は誰知らぬ者もあるまい。但し炭坑のあるのは、實は千金寨と云ふ所で、撫順とは實は一里ほど離れた、滿洲の古城下の名である。

露西亞の經營して居た頃は、至つて小規模の物であつたが、今は東西約五里、南北一里に及ぶ間、最新式の採炭法によつて、毎日五六千噸宛を掘り立て居るのに、尙當分は無盡藏だと云ふ。

米倉坑長の案内で、其中の大山坑に降りて見た。僅か二十四五秒で、千二百尺の地下まで降りたが、降りて見るとこは如何に、寒暖計は七十度以上にして、外套などはとても着て居られない。これは地熱の爲めであらう。所謂地獄の門口とは此所等だ。

り

李王家博物館

李王と云へば、朝鮮の舊天子、併合後は我が親王格として、年々百五十萬圓宛

を贈られ、悠々閑日月を送つて居られるのである。

今、殿下は昌德宮に住はれ、李王職と云ふものが出来て居て、何不自由無くお世話をして居る。

僕は京城見物の序、その立派な宮殿から、廣い後苑にも案内され、また博物館を観る事も許された。

この博物館には、稀代の珍寶も數々あるが、中で一番目に付いたのは、新羅の玉笛であつた。玉で出来た一管の横笛。これは新羅の古代の寶器で、秋風嶺を北へ越しては、決して音を出さぬと云ひ傳へられて居た。その奇特を無にして、管て大院君が、無理にこれを取り寄せやうとしたら、途中で落ちて破れてしまつたので、恐れて再び返へしたのだと云ふ。だから今は鐵の箱がはまつて居て、全く音も出なくなつてしまつた。

ぬ

盗人の晝寢所

盗人の晝寝と云ふ事があるが、その晝寝に丁度好い所が、満洲の一部にある。それは長春と寛城子との間の、三不管と云ふ所だ。長春は南滿鐵道の終點、寛城子は東清鐵道の東端、その日本の附屬地と、露西亞の租借地との境に、線路の都合で妙な土地が餘り、其所へは支那の勢力も届かない様になつてしまつた。丁度地界の垣根と垣根の間に、箒木の届かない所が出来た様なもので、三不管とは其所から來た名、即ち三國とも管しないと云ふ事である。

と、それを幸ひ、三國の惡黨共が其所に落ち合つて巢をかまへ、夜は方々で悪い事をしては、晝は此所へ來て寝そべつて居るのに、何所からも手が出せないのださうだ。厄介な所もあればあるものぢやないか。

る 墨々たる土饅頭

満洲でも北支那でも、珍らしがつて汽車の窓に取りつく、初めての旅人に、一番眼につくのは、廣い廣い野原に、まるで大きな土塊の突きあけた様な、饅頭形

の地瘤が、墨々として群を爲して居る事だ。それは墓地なのである。

墓地と云へば、石塔や木標や、卒塔婆や、白張の提燈が、雜然として立ち列んで居るとのみ思ふのは、日本内地での話で、彼地の普通の人の死骸は、皆かうして野原の中へ、土を盛りあげて埋めて置く許り、別に目標の石も無い。よくあれで間違へないものだと思ふ。

殊に甚しいのは、支那では子供の葬式を、極めて粗末に扱ふ事だ。これは親に先だつて逝く、大不孝者だと云ふので、野原へ無造作に棄てた許りで、犬や鳥に食はせてしまふのださうだ。まさかとは思ふが、聞いた通りを書く。

を 落付かぬ生徒

満洲至る所、今は日本式の小學校が出来て居て、其所に日本の生徒が居る。僕の見た所でも、一番少いので五六十人、多いのは五六百から千人近くもあつた。此等の生徒は、皆その父兄に連れられて、此地方に來て居るのだが、父兄の都

合で、度々居所が變る爲めに、其都度轉學しなければならず、甚しいのになると、六年間に七八度も學校を換へて、一學年と一つ學校に落付いて居られぬのがあるさうだ。なんと氣の毒な話ではないか。

その代り一方からは、非常な優待を受けて居る。即ち汽車は一切無賃で、而も二等室に入れられ、貨車を利用した場合には、停車場の無い所でも、家の近間で便宜に停めてもらふ事も出来る。

又面白いのは、元より新開地の事だから、各地の生徒の寄り集つて居る事で、一つの學校に、三府四十二縣の者があるなどは、内地ではとても見られない事だらう。

わ 渡鳥の戸迷

旅順の白玉山には、三千何百尺と云ふ、素敵に高い表忠塔が立つて居る。夜は頂邊に電燈が點いて、傍ら燈臺の用をもつとめて居るらしい。

所がこの高塔に、なまじ電燈が點く爲に、とんだ戸迷をさせられるものがある。それは毎年冬になると、北の方から南の方へと、寄つて来る雁鴨の類だ。

彼等は元より夜目が利かない。所がこんな高い所に、ピカ／＼光る物があるので、それ許りを便りにして、霧地に飛んで来る。

と、それは石や銅で出来た、滅法堅い塔だからたまらない。忽ちそれに鼻をついて、面食つて其下に落ちる。落ちた所を生捕つて、人間が忽ち食つてしまふ。

今にまたこの近所に、渡鳥の爲めの招魂塔でも立たなくては、ちと冥利の悪い話だ。

か 寛城子の荒廢

寛城子と云ふ所は、前にも云つた通り、露西亞の東清鐵道の、一番東の端にあるのだ。

長春からは一哩内外なので、一寸其所へも覗きに行つた。

十年程以前までは、此所には支那人も大勢住み込み、かなりの市街であつたものだが、今は全く荒れに荒れ、寂れに寂れた小村になつてしまつた。これに反して長春の方は、日一日と發展して、町も賑へば、人も活々として見える。戦勝國と戦敗國とは、この二ヶ所を對照して見ても、著しい差が認められるではないか。

よ 幼年の先帝

支那は今度共和國に成つた。そして袁世凱なる人が、天子に代つて大統領になつた。これは支那許りではなく、世界の上での大問題である。

僕が丁度北京へ入つたのは、その袁大總統が就任式をやつてから、僅か三日目であつたが、昔は天子の即位式をやつた、宮中の大和殿と云ふ所に、其式場の裝飾が残つて居て、公衆の參觀を許してあつた。かうして支那の政體は變つてしまつたが、また一方には、先の清朝の幼主宣統皇帝が、尙一隅に生存して居る事を、

また忘れてはならぬであらう。殊にこの幼帝は、まだ十歳に満たぬけれど、性來頗る聰明の方で、近侍の忠臣陳寶琛や、世續なども、これには大いに意を強くして居ると云ふ。

た 大同江の砦

大同江は平壤を流れる大河で、日清戦役の當時、有名な激戦のあつた、牡丹臺、乙密臺、立武門、乃至船橋里などと云ふものも、皆この河の沿岸にあるのだ。

所が此邊は、古戰場としては規模の小さなものだが、名所としてはなかく景色の好い所だ。今に此所を大公園にすると、土地の者が計畫して居る様だが、之れは頗る名案だと思ふ。

また牡丹臺の麓浮碧樓の下から、大同江を船で降ると、右岸の絶壁の面に、種々な文字が刻み込んである。これ丈でも面白いのに、更に旅人の目を惹くのは、その下流の河原には、女共が大勢下り立つて、頻りに洗濯をし、織んに砦を叩い

て居る事だ。朝鮮人は白い衣を着るので、この洗濯と云ふ事が、女の主な仕事だと云ふ。

れ 靈地の乞丐

支那位乞丐の多い所はあるまい。否、一體支那人の多数が、已に乞丐根性を備へて居ると云つても、必しも過言でないのかも知れない。

例へば奉天の北陵でも、北京の萬壽山でも、喇嘛の寺でも、孔子の廟でも、さう云ふ神聖な所、崇靈な地を参拜して廻るに、其案内者なるものが、殆んど何れも乞丐の様な奴許りだ。

これはその風俗の、汚らしいと云ふ許りではない。その根性が頗る下劣で、正當に拂ふべき案内料の外に、何分かの酒手を所望する。そして之を挑ねつけても、別に腹も立てない代りに、相手さへ變れば幾度でも手を出す。

いくら恥を搔かされても、取る物さへ取れば可いと云ふ。こんな國でも今以て、

孔子を祀つて居るのが不思議だ。

そ 蔬菜品評會

南滿洲鐵道會社では、滿洲開發の目的を以て、所々で種々の事業を計畫して居る。此程開かれた蔬菜品評會なども、即ち其一であるのだ。

これは鐵道沿線の、各地で二三日宛開きまはつて居たが、僕の行き合はせたのは、十月十八日、即ち本溪湖での會であつた。

蔬菜と云へば、云ふまでもなく、菜、大根、薯、胡蘿、所謂八百屋物であるが、中にも此地方では、白菜が最もよく出来る代りに、大根や牛蒡の類は、まだ至つて不成績の様だ。

尤も此等の出品者は、決して専門家許りではない。皆沿道の會社員が、公務の傍らの手ずさみである。それにしては立派なものだ。茲でも品評會が初つてから、滿洲の地も大分青くなつて來たと云ふ。それ丈でも成績は著しいでないか。

つ 月の入り所

草より出でよ草に入るとは、昔の武蔵野の月を云つた事だ。

日本の様な島國の、その一部の武蔵野でさへ、この觀があるのだもの、ましてあの長春附近の、山の少い滿洲平野では、月の出入が更に妙だ。

それも今少し早ければ、例の高梁が生えて居るから、それこそ草から草に入ると云へやう。所が僕の行つた時分は、その高梁は刈りつくされて、切株さへ跡の無い所もあり、只大きな赤茶けた土のうねりが、幾つとなく連つて居る許り、何方向いても際限の無い所は、月の出入りにも足場が無くて、さぞ張合の無い事だらうと思つた。

仲磨も此所に居たら、三笠の山の歌も出来なかつたらう。

ね 鼠の代りに蠅の買上

ベストと云ふ奴が來てから、急に鼠の價が出たのは、内地での事であるが大連では鼠の代りに、蠅が大層賣れた事がある。

一體滿洲と云ふ所は、非常に蠅の多い所だ。とは戦争の當時から、毎度聞かされて居た所だが、今度初めて渡つて見ると、その割に蠅が見えない。内地でも九月から十月、それも残暑の消えない日には、ブーン／＼とうるさい物だ。所が大連の宿に居るのに、つひに氣の付かない程蠅が少い。

これはこの夏頃、民政署から布令を出し、一合金何錢と云ふ相場で、蠅を盛んに買上げたからだと云ふ。

日本でも夏になつたら、この蠅買をやつて貰ひ度いものだ。さうしたら流行病も、大いに少くなるだらうに。

な 何の爲めのサアベル

安東の學校で話した時の事だ。一方の窓側を見ると、金筋、金ボタンの制服を

着た人が、ズラリと十三四人列んで聞いて居る。

初は警官が知らんと思つて居たが、後で聞いたら、それは皆朝鮮の學校教員で、新義州から傍聴に来て居たのだと云ふ。

それから鴨綠江を渡つて、朝鮮の地に入つて見ると、成る程到る所の學校に、皆此通りの先生が居て、中にはサアベルを下けて居たのもあつた。否、下けるのが規定ださうだ。

如何に軍政主義だと云つて、小學生徒を教育するのに、何でサアベルが要るだらう？ それとも尙武主義だと云ふなら、むしろ生徒全體にも、下けさせてやるが可いぢやないか。

それで女生徒はと聞くなら、此等には看護婦の服を着せるさ。

ら 喇嘛殿の荒類

北京を見物に行く者は、必ず喇嘛殿を遺しては成るまい。これは單に喇嘛寺と

してはなく、此所も離宮の様なものであるからだ。

昔清朝第三世雍延皇帝は、康熙帝の第四子として、初め雍和宮と云ふのに住んで居られ、後帝位に即かせられてから、この宮を喇嘛僧に寄附された。それが今の喇嘛殿である。かう云ふ由來がある位だから、其規模も構造も、殆んど宮城に次ぐ位、立派な結構の物である。今は只荒れに荒れ、軒は傾く柱はゆがむ、屋根には草が生えて居る仕末。それでも喇嘛僧は大勢住んで居て、神妙に佛像の御守はして居るが、人さへ見ると手を出して、合力を求めぬのに汲々として居る。世も末だとはこんな所で云ふ語だらう。

む 昔の御所

奉天の舊城内には、清朝の太宗の居られた、昔の御所が残つて居る。此所は北京の比して其十分の一にも足りない位な、至つて小規模の構であるが、其代りこの宮中には、世にも貴い清朝の寶物が、幾棟かの寶庫に藏まつてあるのだ。

僕の見物に行つた時も、正殿の玉座の所などは、鳩の糞だらけに成つて居り、天井から欄間の如きは、煤けて蜘蛛の網に包まれて居た。それでも寶庫へ入つて見ると、大きな純金の印章や、ダイヤモンドで飾つた寶冠や、七寶を鑲めた香爐や、眞珠を繡ひ込んだ掛物や、その他鬼が島にも無い様な、偽の様な見事な寶物が、正に端近の棚に置いてあつた。これには誰も二度吃驚であらう。

う 鶉の名所

鶉鳴く深草の里と云ふから、其邊には澤山居るのだらうが、東京などで鶉と云へば、滅多に膳にも上らないものだ。所が旅順と云ふ所では、鶉が一羽たつた一錢、日本の雀よりも廉い位だ。これは此地方に、鶉が澤山居るからで、甚しい時は、大きな手網を持ち出すと、子供でも樂に捕られる。

一體鶉も渡鳥の一種だ。それで毎年秋になると、滿洲の奥の方から、南へくと飛んで来るが、旅順まで来ると、先が海で一寸渡れない。仕方がないから此所で止まる。それで先がつかへて居る所へ、後からも段々込み合つて来るから、遂には山も野も畑も里も、鶉で埋まつてしまふのださうだ。話半分に聞いて置いても、何しろ鶉の名所たるに相違無い。

あ 居候の威張る國

支那の乞丐澤山なのに反して、朝鮮には乞丐がまことに少ない。これは何う云ふものだと、その理由を聞いて見て、支那と朝鮮の差が所が解つた。支那は個人主義の國だから、兄弟でも金銭は他人、世話にもならんが、世話もしてやらんと云ふ風だ。所が朝鮮では、親類の者が零落れると、互ひに世話をしてやる事になつて居る。で、世話をするのが親類の義務であると同時に、世話になるのがまた同族の權利でもある様になつて居る。随つて居候になるのも、三杯目

にはそつと出す様な、遠慮は決して要らん所か、大手を振つて食ひ倒して行けるのださうだ。

乞丐の多いのは元より感心した事ではないが、かう云ふ居候の多いのも、亦決して褒めた話ではない。

の 乗心地の好い汽車

満洲の汽車は、評判にちがはぬ好い汽車だ。

まづ第一に廣軌だから、内地の汽車ほど揺れが無い。それに構造が立派で、扱ひが丁寧だ。僕は先年亞米利加を廻つた時、所謂ブルマン式の贅澤車に乗せられたが、その時にも劣らない位な、乗心地の好い事であつた。

だから僕はこの汽車の中で、よく眠り、よく食らひ、よく読み、又よく書く事も出来た。國民新聞に出したお伽噺や、大阪毎日に送つた通信は、大方この中で書いたのである。

お 恩津の大佛

朝鮮鐵道の大田から分れて、群山港へ向ふ途中、汽車の窓から左の方、凡そ二十町ほど隔つた小山の半腹に、ニヨキとして大きな石佛の顔が見える。恩津の大彌勒と云ふのはこれだ。

高さ七丈に及ぶとも云ふし、又五丈位だと云ふ説もある。生憎行つて見る間が無かつたから、何方が眞實か解らないが、何しろ總體が白味のある石で出来て居て、頭は馬鹿に大きな上に、變てこな冠物をのせて、變な恰好の佛様たる事は、畫葉書で見ても承知した。

この石佛を此所に据ゑた時に、一寸お伽式の口碑がある。それはこの大きな頭を何うして上に載せたものかと、人々が思案に暮れて居た。その時、ある河原の所で、子供が石を積んで遊んで居るのを見ると、重い石を高い所へ載せるには、まづ下から土を盛りあげておき、その土の傾斜の所へ、石を段々に押しあげて行

つて、定め^{さだ}の所^{ところ}へ据^すゑた上で、盛りあけた土^{つち}を取り拂^{はら}ふ様^{よう}にして居^いた。
これを見て成^なる程^{ほど}と感^{かん}心^{しん}し、早速^{さつそく}その通^{とほ}りやつて見^みたら、さしもの大^{おほ}頭^{たま}も、難^{なん}無く押^おし据^すゑる事^{こと}が出來^{でき}たが、これも全^{まった}く佛^{ぼつ}様^{さま}が、子^こ供^{ども}に成^なつて智^ち慧^ゑを貸^かして下^{くだ}だすつたのだと、一^そ層^{うゑ}難^{がた}有^あがつたと云^いふ事^{こと}だ。

く 群^{ぐん}山^{ざん}の米^{まい}作^{さく}

滿^{まん}洲^{しゅう}の宿^{やど}屋^やで食^たべた米^{こめ}が、思^{おも}ひの外^{ほか}甘^{あま}いので、何^{どこ}所^{ところ}で出^で來^きるのかと聞^きいたらばこれは朝^{てう}鮮^{せん}米^{まい}だと云^いふ事^{こと}だつたが、朝^{てう}鮮^{せん}は何^{どこ}所^{ところ}で出^で來^きたのだらうと思^{おも}つたら、恰^{あた}もこの群^{ぐん}山^{ざん}附^ふ近^{きん}が一^{いっ}番^{ばん}だと云^いふ事^{こと}だ。
只^{ただ}見^みる一^{いっ}望^{ぼう}萬^{まん}頃^{けい}の出^で來^き秋^{あき}、而^{しか}もその田^{でん}圃^ぼには、鳴^な子^こも無^なければ、案^あ山^{さん}子^しも見^みえない。こよらも大^{たい}陸^{りく}的^{てき}の所^{ところ}だらう。

や 屋^や根^ねの穴^{あな}

旅^{りょ}順^{じゆん}は世^せ界^{かい}的^{てき}の古^こ戦^{せん}場^{ぢやう}として、永^{えい}久^{きう}に保^ほ存^{ぞん}さるべき所^{ところ}である。今^{いま}その戦^{せん}蹟^{せき}保^ほ存^{ぞん}會^{かい}とも云^いふべきものが、其^{その}地^ちで企^{くは}てられて居^ゐるのは、大^{おほ}いに喜^{よろこ}ばしい。
で、其^{その}所^{ところ}を訪^まづれる者^{もの}の、まづ第^{だい}一^{いち}に足^{あし}を停^{とど}むべきは、か^かの戦^{せん}役^{やく}記^き念^{ねん}館^{くわん}であらう。そしてこの館^{くわん}を訪^まづれる者^{もの}の、まづ第^{だい}一^{いち}に目^めを惹^ひかれるのは、その屋^や根^ねの穴^{あな}である。

此^こ所^{ところ}はもと露^ろ軍^{ぐん}の將^{しやう}校^{かう}集^{しよく}會^{かい}所^{じよ}であつたのだ。それだから戦^{せん}争^{そう}の當^{たう}時^じ、その屋^や根^ねに降^ふりかよつた、我^{わが}軍^{ぐん}からの砲^{ぱう}彈^{だん}は、決^{けつ}して少^{すく}な事^{こと}では無^なかつた。
屋^や根^ねは流^{りゅう}石^{せき}に繕^{つくろ}つても、天^{てん}井^{じやう}の穴^{あな}は其^{その}儘^{まま}にして、當^{たう}時^じの劇^{げき}戦^{せん}を偲^{しの}ばしめる様^{よう}にしてあるのだ。殊^{こと}に尊^{たふ}い記^き念^{ねん}ではあるまいか。

ま 萬^{まん}壽^{じゆ}山^{ざん}の絶^{ぜつ}景^{けい}

日^に光^{くわう}を見^みない者^{もの}が、結^{けつ}構^{こう}と云^いふ事^{こと}は出^で來^きないから、萬^{まん}壽^{じゆ}山^{ざん}を見^みない者^{もの}は、絶^{ぜつ}景^{けい}と云^いふ事^{こと}はで^{でき}ない。

何しろ萬壽山は、人工の美と、天然の勝とを兼備した、夢の様な所だ、晝の様
な所だ。お伽噺の様な、オペラの様な所だ。池の中には、大理石の樓船が横はつ
て居る。山の上には、銅の高塔が立つて居る。樓閣は幾重とも覺え切れず、廊下
は何町ともはかりきれない。ざつと見物した許りでも、二時間はかゝつてしまつ
た位だ。

此所は元の天子の離宮で、西太后の隠居所になつて居たが、今は例の宣統皇帝
が、此所に住む事になるのだとも云ふ。こんな所に居られるなら、あの幼帝の御
相手になるのも、僕は御断りはしまいと思つた。

け 玄武門の二度吃驚

玄武門と云へば、僕は日本お伽噺の中にも、一編として入れた位、平壤では名
高い古戦場である。

所が今度行つて見たら、二度吃驚とはこの事だ。東京にある和田倉門や、櫻田

門に比べたら、その四半分にも足りない位な、小さなく門である。

尤も今は櫓も無く、柱もなければ扉も無い、只石垣のトンネルの様なものだが、
その天井に當る所でも、僕位の丈があれば、手を伸ばしたら届きさうに見えた。
だからその天井には、さかんに樂書がしてあつたが、中でも一番目に立つたの
は、劍舞師日比野雷風君の名であつた。これは頗る所を得たものだ。

ふ 普通學校

朝鮮には小學校が二た通りある。其一は日本人ので、他は朝鮮人のであるが、
その後者を普通學校と云つて、又朝鮮人中學を、高等普通學校と稱へて居る。

平壤ではその二ヶ所とも見たが、今は朝鮮の少年子弟が、皆日本の教科書を用
ひ、一切日本語で教授を受けて居る。こんな事なら、何も別にする必要は無さ
うだが、合併後日も浅い今日、まだ其處までは運ばないと見える。

然しある教場へ行つた時、生徒の朝鮮人が、正しい東京語を使つて居るのに、

先生の日本人が、ひどい奥州訛りで教へて居るのがあつた。

乙 コンドラチェンコ討死の跡

旅順の東鶏冠山北砲臺は、最も慘劇の演じられた所だ。折角地下道を掘りつ
つ進んだ、我が忠勇なる一部隊が、敵の仕掛けた爆發薬によつて、微塵に成つて
全滅したのも此所だ。

更に又敵に取つては、此方面の指揮を司つて居た、コンドラチェンコ少將が、
我から放つた砲彈の爲めに、見事討死したのも此所だ。

爾來既に十年を経て、今は此所に、日兵の帽草も落ちて居なければ、又露將の
ボタンも見付からない。然し丁度僕等の行つた時は、非常な烈風が吹き荒んで、
横面を打つ土砂の痛さ、さなから當時の苦戦を偲ばしめた。

え 營口の支那街

營口は遼東灣の要地、兎も角も開港場であるから、さぞ立派な所だらうと思つ
たのに、行つて見たら大ちがひ。

有名な遼河は、まるで漕泥を流した様な川だ。停車場附近の日本租借地は、何
だか焼跡を見る様な町だ。

若し夫れ支那街に至つては、幅は狭く、道は悪く、人は臭く、家は汚く、一時間
許りの見物に、僕はウンザリせざるを得なかつた。蓋しこの滿洲が、遼河許りを
唯一の交通と恃んで居た頃は、なるほど營口は大切な所だつたらう。然しもう滿
洲線と云ひ、京奉線と云ひ、鐵道が立派に出来てからは、此所はそろく時勢後
れになつて、さてこそ發展が鈍るのである。

て 天下第一關

萬里の長城は、山海關からはじまつて居る。奉天から北京へ行く途中、丁度こ
の驛を通るから、其の長城の萬分一位は、汽車の窓から眺められるのだ。殊にこ

こから山手を見ると、大蛇の這ひ登つて居る様な、例の城壁の一部に、兀立した樓門が見える。「天下第一關」と云ふ、有名な大額の掛つて居るのは此所だ。又此所には支那兵の外に、日本の守備兵も詰めて居るので、二國の二様の兵士共が、停車場を警備して居るのも、一寸内地では見られない圖だ。

あ 旭山の古戦場

旭山と云ふのは、安奉線の橋頭驛に沿うて居る、一帯の丘陵を呼ぶ名だ。多分日本側で付けたのであらう。

此邊は三十七八年戦役の際、鴨綠江から進んだ黒木軍が、頗る苦戦をした所で、一名細河沿とも、亦白雲寨とも云つて居る。

今當時の記念としては、山上に自然石の忠魂碑が立つて居て、其側には分捕の砲も置いてある。

又、當年騎兵團を率ゐて御勇戦あらせられた、閑院宮殿下の御座所であつた古

寺は、今も崖下に残つて居て、守備隊の兵營になつて居る。

この山は、一方は勾配の緩い傾斜になつて居るが、他の一面は切り立つた様な岩壁になつて居て、下は一望萬頃の平野、その間を細河の流れが、白蛇の様に縫つて居る。

僕の行つたのは十月の十八日、岩の間を彩る紅葉は、當年の勇士の血煙をも偲ばせて、一層の美觀を添へて居た。

美觀と云へば、此所から二三哩隔てた所に、釣魚臺と云ふ所がある。此所はこの安奉線中で、随一と稱せられる絶景の地だが、惜しいかな、汽車があまり近くを通るので、特に後尾車のプラットホームに出て居ても、長く嘆賞する事が出来なかつた。

さ 三百年祭の釜山

釜山は朝鮮の中でも、最も内地に近い丈に、最も早くから交通も開け、市街も

最も日本式に發展して居て、現に太正の二年は、其開港三百年に當る事になつたが、僕の行つた十月三十日には、新天長節と三百年祭との準備で、市中は非常に色めき立つて居た。

但し其當日は、もう僕は門司へ来て居たので、其賑ひは知らなかつたが、何でも日鮮人合同の大提灯行列などがあつて、頗る振つたものらしかつた。

市の中央の岡の上にある、龍頭山神社と云ふのは、即ち釜山開港の恩人、宗義智を祀つたものである。

き 居留地の共進會

天津は北清事變の古戦場で、また革命亂の騷擾地ともなつた。

然し今は立派な貿易市となつて、各國の居留地が、殆んど共進會と云つた様に道路にも、公園にも、民家にも、官衙にも、それ／＼その體裁を飾り合つて居る。中でも一番立派なのは、佛蘭西と獨逸だが、日本も此所ではなかく發展して

居て、其の旭街など云ふ所は、内地で一寸見られない程、ハイカラ式の發展をして居る。これも近隣の刺戟のお蔭だらう。

僕の弟は此地の三井洋行に在勤して、已に足掛八年になつて居るが、其實際見た話によると、先年革命の亂の時などは、官軍に捕はれた暴徒を斬るのに、支那街の一番賑かな所へ引き出して、群衆の環視して居る中で、二十近くの生首を、ゴロリ／＼と薙ぎ落したさうだ。

一方居留地の文明式なるに對して、一方支那街にはかうした蠻風が、まだ平氣で残つて居る所が、又天津の天津たる所かも知れない。

ゆ 輸入の魁

歐羅巴の文明が我日本に入るには、何うしても海上から來らざるを得なかつた。但しそれは昔の事である。

今や朝鮮は併合され、滿洲も我手に委かせられたとなると、先に海を渡つて來

た文明は、今は陸から入つて来る様になつた。

そしてその一番最初に、我々邦人に觸れるのは、即ち南滿線の最北端にある、彼の長春と云ふ所である。

此地は元と蒙古に屬した、一寒驛に過ぎなかつた。それが露國の手に移り、次いで我手に轉じてからは、非常の發展を來たすに至つた。

歐羅巴からの文明の輸入を、一番先に受取るのは、即ち此所だぞと云はぬ許りに、何れも大いに意氣込んで居る。現に小學校の生徒すらも、高等科に居る者の中には、支那語蒙古語を話す外に、露西亞語をも解する者がある位だ。なんと頼もしい所ではないか。

め 名相の靈廟

支那に於ける有名な宰相、彼の李鴻章の廟は天津にある。立派なものだ。

但し廟とは云ふが、云はど一構の邸宅の様なもので、後には立派な泉水もあれば、隣には美事な劇場も付いて居る。

そしてこの泉水の中島には、洒落れた水亭が出来て居て、夏は納涼の客を以つて充たされ、又劇場には時々宴會が開かれて、各國の紳士が寄り合ふ事もある。

また廟舎の前の中庭には、同じ形の石碑が立ち列んで居るが、それには李鴻章の一代記が、順々に刻み込まれて居るのだ。

み 民國の成立

支那が幾度か内亂のあつた揚句、遂に帝國から民國に變つたのは、大正二年十月十日の事であつた。

丁度其日、僕は奉天に居た。この奉天と云ふ所は、清朝には最も由緒の深い處だ。即ち太宗の陵墓もあれば、またその王宮も残つて居るので、僕はそれ等を見に廻つたが、途すがら民國成立の祝賀の旗が、市中に飾り立てられて居るのを見ては、少からず感に打たれた。

それから又四日ほど経つて、北京へ遊びに行つた時は、新大統領が就任式をしたと云ふ、大和殿の式場をも見たが、此所は歴代の帝王が、戴冠式を擧げた所だと聞いて、更に感を深くしたのである。

聞けば彼の就任式は、帝王の即位式にも劣らないほど、頗る勿體らしいものであつたと云ふ。然し場所は同じでも、流石に氣がさしたと見えて、大和殿と云ふ扁額が、只禮堂と掛け代へてあつたのは。まだしもほらしい所であらう。

し 首山堡の古戦場

首山堡と云へば、有名な陸軍の軍神、橋中佐の戦死した所である。

時は恰も八月三十一日、只さへ炎暑に惱まされた士卒が、更に修羅の巷に苦しんだ、當時の忠魂を弔ふべく、之に上つたのは十月七日の事だつた。丁度其前日、福岡子から遼陽へ向ふ汽車中で、首藤參謀長と乗合せ、當時の戦況を聞かされてから、一層魂を躍らせ、即ちその翌日、特に櫻井副官を煩はして、其地の案内

を請うたのである。

一體首山と云ふ所は、平野の中に突立つた岩山で、決して高い山ではないが、周囲がおツ開いて居るので、展望が頗る好い。昔唐の天子が此所に驛を駐めたのも即ち其爲めで、今でも其頂邊には、烽火臺の跡が残つて居る。

僕等は即ち其の臺に登つて、遙かに古戦場を見渡したのだが、軍神が忠死を遂げた所は、其所からは斜めに見下される許で、別に標の目に立つものも無かつた。蓋し其の當時は、敵はこの要害に據つて、我軍を食ひ止めやうとしたのを、我軍は又全力を注いで、惡戦苦闘を試みたので、さてこそ死傷も多かつたのである。さるほどに爾來十年、此所に登つて當年を偲ぶ者が、已に幾千人に及んで居るから、随つて當時の弾片なども、全く拾ひ盡された筈だ。然るに何たる僥倖ぞ！僕はこの山の岩陰で、可なり大きな破彈の一片を拾ひ得た。云ふまでもなく、日本軍から放つた、日本魂の塊かと思ふと、僕に取つては好個の記念物だ。今に大切に取つてある。

巻 畫卷の正の物

朝鮮の子供の風俗は、非常に僕の氣に入つた。ほんとに綺麗で、又可愛らしい。殊に女の子の服装は、日本古代の風俗そのまゝで、上が赤なら、下が萌黄、上衣が紫なら、袴が黄と云つた様に、一切模様も縞も無い、はつきりした物ばかり。それに頭髮は中央からわけて、後に花やリボンを飾つた工合は、如何にも優美で、而もあどけなく、それが松の木の下や、芝生の上で遊んで居る處は、まるで古の畫卷物を見る様だ。

日本でも奈良朝の頃は、屹度こんな風であつたらうと思ふと、なまじハイカラぶつた今の風俗が、むしろ呪ひ度い様な氣もする。

ひ 羊の霞

日本でも大分牧畜と云ふ事が行はれて來た。然しそれは、まだ馬、牛、豚位の

所に止まつて、羊までは手が届いて居ない様だ。

所が滿洲へ行つて見ると、方々にこの羊の牧場が見える。中に就いて、僕の一番多く見たのは、奉天の郊外、例の北陵へ行く途中であつた。

其時の句に

地に委して羊群秋を霞みけり

と云ふのがある。これは土地とまるで同じ色をした幾百とも知れない羊の群が、土と空との境界線を、遙にウヨクとして居る景色を詠んだので、内地ではとても浮ばない句だ。

も 門番の大男

北京にも此頃は動植物園が出來て居る。此所は西太后の御氣に入りの場所、毎度行啓があつたと云ふが、僕等の目には一向幼稚なものだ。

然し只一つ、此所に珍とすべきものは、その門番に大男が、而も二人まで置い

てある事だ。その一人は、嘗て日本へも来た事のある男で、只ヌーボー式にふやけた様な、無恰好な圖體は、正に横綱以上である。試みに土産の寫眞に取るべく、僕はその側に立つて見たら、この五尺五寸五分の男が、やつとその乳までしか無かつた。

せ 清凉里の廟所

京城から一里餘り隔て、清凉里と云ふ所がある。名許り聞くと西洋料理と間ちがへ、字を見ると納涼場の様に思はれるが、此所は王妃達の墓のある所だ。左右に落葉樹の森をひかへて、その間を大道のうねつて居る所は、一寸西洋の公園にでもありさう。

さて廟所はと見ると、小高い所に大きな土饅頭が築いてあつて、其下に、禮拝堂が設けてあり、周囲は綺麗な芝生になつて居る。

前の日慶福宮の奥庭で、関氏の最後の場所を見て、如何にも祟のあり氣に感じ

た僕も、この廟所の立派さを見ては、彼も正しく浮んだらうと思つた。

す 鈴の鳴る汽車

日本の汽車はビート云つて出る。滿洲の汽車はガラン／＼と揺れ出す。此邊が狭軌と廣軌の差だ。

あの大きな汽罐の頭に、高く半鐘を掲げて、之を鳴らしながら進行するのは、先年北米を廻つた時に、目にも耳にも馴染らされた事だつたが、今度また同じブルマン式に乗つて、坐るに彼時の事を思ひ出した。あはれこの滿洲も、この鐘の音の繁くなるにつれて、その文明の度の進むことも、やがて北米の如くであれかし。其場合我が日本人は、さしづめ彼所での英國人と云ふ役目だ。——蓋し大いに努めずんばなるまい。(大正三年)

目
輛の一泊

日東第一の形勝！ 輛はなる程好い所だ。五六年前、瀬戸内海の週遊船に乗つて、此所も海から見た事はあるが、時間が無くて上陸しなかつたから、何の事は無い、御馳走の香氣許り嗅がされて、指を咬はへて通り過ぎた様なもの。それが今度縁あつて、此所に一日でも遊ぶ事の出来たのを、煙霞の神に感謝せざるを得ない。

時は四月二十六日、神戸を朝立つた急行車が、福山に着いたのは正午であつた。此所からは輕便鐵道によれば、一時間足らずで輛へ行ける。

が、幸ひ四十分許り餘裕があつたので、序ながら

福山城址に登つて見た。規模こそ小けれ、小ぢんまりとした天守閣も其儘立派に残つて居て、其下にはお定まりの招魂社、境内には櫻、海棠、藤などの景物、

或は已に萎れ、或は未だ蒼んでは居たが、踏砂の白さや、道芝の緑と相映じて、蝶も塒を求むべく見えた。

福山は中國の要地、幕末の名臣阿部伊勢守の領地、今も人口は三萬に及んで、優に市たるの資格はあるのだ。この城址から見おろすと、殆んど全部が瞰られる。定めし名所も多からうが、先を急ぐので後日の事にし、やがて輕便鐵道なるものに乗せられた。

大した橋もなければ、長いトンネルもなく、已にして右に高い茂山を仰ぎ、左に廣い入江を眺め、さて前に大きな島山を見るに當つて、はや輛の町に着いた。

但しその停車場は、町の最も端にあるもので、それから俾に運ばれて、宿と定められた對山樓に来るまでには、長い町をうねり、小高い坂を一つ越えて、更に小路を入らねばならない。その間には、多く鍛冶屋の店を見、屢々保命酒の看板を見る。これは共に此所の名物だ。

對山樓と云ふは、海に面した大きな料理屋、兼旅館なるものだ。奥の露臺に

出て見ると、前には、

辨天島 があり、其先に

仙醉島 があつて、これがまるで此家の爲めの、庭であるものよ様に見える。

さて左の方を見ると、海につき出た懸崖の上に、まるで晝の様なお寺がある。此所が福禪寺なるもので、名高い

對潮樓 とは其方丈の事だ。

さて又右へと眼を轉ずれば

皇后島 玉津島 遠くは

洲上島 までが、さながら形の好い盆石を、青疊の上に列べた様である。

あれこれと説明してくれる有志者に取まかれて、殆んど茶を飲む間も忘れて居ると、やがて船の用意が出来たと云ふ。これは此所から海上一里、傳説的名勝として、寫眞に各停車場の待合を飾つて居る、例の

阿伏兔觀音堂 へ參詣の爲めだ。

船は恰も海潮樓の下から出た。案内は桑田、岡本、原田の三氏、それに宿の女中とである。沖の様に入江の面を、軽い船聲に送られながら、夢の様にすべつて行く、……之をこの一時間程前まで、煤煙をあげながら揺られて居た、あの汽車の乗心地に較べて見ると、さながら窮屈な仕事着を脱いで、ゆらりと浴衣に着かへた様だ。

尤も生憎の空模様、其頃からポツ／＼降りはじめたが、それも却つて一興と、僕は笠を頭上にのみ張らせ、舳から吹き込む小雨は、外套の袂に之を防いで、四方の眺めを撞にした。

原田君俳名蘆洲、書物を扱ふ商賣柄に、頗る此邊の地理に委しい。僕は其説明を聞きながら、右に左に首を回らすのに、景は船の進行につれて、晝巻を順々に繰りあける如く、目は又耳より忙しい。

更に口をも休ませまいと、女中は用意のビールを抜いた。序に何か下物はと聞くと、これはしたり何も無い。まよよ其邊の漁師船につけて、鮮の最も鮮なるも

のを譲らせ、それを手料理も却つて妙と、やがて阿伏兔に近づく頃、恰も一艘の漁船を見かけた。

まづ慇懃に聲をかけて、何が獲れたと聞いて見ると、皆チヌ許りだと云ふ。チヌとは僕等の聞かぬ名と、其の水槽をのぞいて見れば、これは品川沖などでとれる、カイツに縞のある様な魚だ。

談判よろしくあつて、その六尾許りを購ひ取り、やがて阿伏兔の岬に着けた。

阿伏兔は、田の島と相對して、狭い瀬戸を守り顔に、地方の地先へ突出した、岩鼻の一帶をさすのらしいが、之を遠く海上から見ると、恰も伏した兔に似て居るので、此名があるとも傳へて居る。

聞説 天正の昔、漁師次郎左衛門と云ふ果報者、ある時海中から網し參らせた、石像の觀世音菩薩を、此所に安置し奉つたと云ふ御堂だ。見上る許りの岩の上に、さらに石段を積んで築かれ、それに廻廊の通ふさまは、正に是、大人國の盆景を、一寸此所へ借りて來た様だ。

船から上つて、直ぐ石段數十を攀ぢ、更に廻廊を斜に登つて、その御堂に達すると、此所は丁度四疊半もあらうか、三方に海を見おろして、晴れては伊豫をも指さすべき海上、只煙雨の濛々たる中に、或は濃く、或は淡く、遠近の島を夢の様に見せて居る。

觀音の御堂を下りて、今度は本堂へ行つて見る。

海潮山磐臺寺とは是だ。折から住職は留守であつたが、遠慮なく方丈へおし上つて、寶物などを見せてもらひ、又縁起を所望して居る間に、蘆洲子の姿が見えないと思つて居ると、これは先刻買った魚を料理すべく、此寺の勝手で、青味や醬油を所望して居たのだ。

と、再び船に歸つてからは、蘆洲子鮓を俎板にかへて、例のチヌを刺身に作り寺から貰つて來た醬油と青味で、早速の下物をすよめてくれた。

生魚の料理に寺からの借り物、ちと平仄が合はぬ様だが、他ならば知らぬ事、此所の觀音様は、元々漁師がお好きで出現されたお方。況んやそのお寺の名まで

が、魚屋に縁ある磐臺寺なるをや、など舌鼓を鉦にかへて、今更の佛徳を讚美しながら、船を元の鞆へと急がす。

此間の陸側には、又

惠比須、大黒岩、姫の瀧 なんと云ふのが見える。岩はその形に似るので呼ばれ、瀧は其の可愛さから名づけられたらしい。

總じて同じ道を往復すれば、往きには珍らしいと思つた景も、復りには早や目馴れて、嘆賞の度も割引されるものだ。然るに此の船路は、往に左に見た島々を復りに右に見るに及んで、其の趣きの異なるを覺え、先に背にして來た仙醉島を、迎へつゝ次第に近づく眺の變化は、更に別圖に對する心地がして、幾度見ても飽かぬのである。

かくて往復三時間、探勝慾を十分に充たして、再び元の宿に歸れば、はやく有志五十許り集つて、僕の爲めに盛宴を張り、又其二次會として別席に潮風社の俳筵が開かれた。

潮風の御堂に薫る岬かな

課題が薰風であつたにつけても、阿伏兔の景が偲ばれてならない。

明れば二十七日、朝は雨が上つて居た。此日は今から二昔前、日清戦役の折の大本營を、廣島市に遷させられた記念日とあつて、此町も少年少女大會が催され、仙醉島公園を會場にして、僕は之に出席すべく、實は迎へられたのである。

が、それは午後の一時。それ迄の時間を利用して、まづ例の對潮樓に登る。

此所は天曆年間、空也上人の開基とあつて、千年に近い古刹の一つだが、有名な對潮樓は、元祿年間に建てられたと云ふ。

日本一の瀬戸内の、瀬戸一番の鞆の浦、其又浦一番の勝地を占めて居るので、昔から此所に足を停めた者、誰か歸りを忘れずに居られたらう。さればこそ正徳元年、朝鮮貢使の一行の、李邦彦と云ふ學士が、爲に「日東第一形勝」と書き残した、其額はまだ正面に掲げてある。

現任職佐竹師、頃日又計畫して、前の仙醉島に、百八の永代常夜燈を建立し、

此靈場の錦上に、更に花を添へやうとして居る。丁度僕の行つた時も、技師が此樓上に望遠鏡をすゑて、其位置を選定しつゝあつたが、出来上れば電氣の力で、百八を一時に點燈する仕掛だと云ふ。

此樓を踏して、更に案内されたのは、

對仙醉樓 と云ふのであつた。これは醸造の大家酒井氏の住居で、讀んで字の如く、仙醉に對する樓と云ふ意味、景致もそれで判じられやう。

蓋し此所は元上杉氏の有で、其頃は例の山陽外史も、太く此樓の眺望を愛し、主人の爲めに長い記文さへ草して居る。又、今から二十年前には、僕の亡父も此所に遊んで、一ト月餘りも厄介になつて居たと云ふ、重ね々床しい所だ。

その床しさに暫時此所に憩へば、兼て用意の筆硯は運ばれ、有志の人に取まかれて、しばらくは揮毫攻めの體、爲めに折角の美景を前にしながら、ゆるく欄による間もなかつた。

然し更に床しかつたのは、此樓が亡父に縁ある許りでなく、此所に來合はせた

人々の中に、更に故人に奇縁ある人の多かつた事だ。其一人は、保命酒の本案入江翁、この人は僕の亡父に、京都の家を譲つた人だ。其家には祖母も久しく住み、僕も二年宿つて居た事がある。又他の一人は醫師倉田氏。此人は其先代が、恰も亡父と同窓であつたとかで、亡父が壯年時代の筆蹟まで、わざぐ持つて來て見せられたのは、場所が場所丈殊に嬉しかつた。

其中に時間も來たので、此所から小學校に案内され、講演二回を済ました後、其近所の

沼名前神社 に詣でた。これはヌナクマと讀むべきだが、普通は祇園社で通つて居る。國幣の中社だけに、境内も廣大だ、社殿も見事に、殊に桃山御殿から物した能舞臺と云ふのが、最も見るべく思はれたが、生憎常蓋に閉ぢられて、屋根許りより見る事が出来ない。

此社のついでに、

小松寺 と云ふのがある。寺はさして立派でないが、庭に珍しい古松があ

る。これは小松内大臣の手植だと云ふ。彼の唐土醫王山へ、喜捨の餘りを齎らすべく、使をば送つて此所まで來た時、之を記念に留めたと、土地の者は云ひ傳へて居る。

さて午後は仙醉島に渡つた。船で僅に十分許り。

吸霞亭と云ふのがあつて、食ふべく、飲むべく、鳥には將た宿るべく、最も好位置を占めて居る。

一體この仙醉島と云ふのは、周回が四十七町、峰は大小二つにそびえて、其に松柏の翠を積み、浦は出入六つにわかれて、何れも眞砂の白きを敷く。むかしある漁師、ある日此島に渡つて、仙人の醉臥を見つけてから、此名があるとも傳へられ、又遠く海上から見ると、仙人の醉臥に似て居るからとも云ふ。然し僕は私かに思ふ、仙醉は元と泉水で、云はゞ庭の様な景と云ふのだらう。之何時頃の風流人が、泉水の名を俗がつて、音通で仙醉と文字つたのではあるまいか。尤もかうした例は此所許りではない。

兎にも角にも此島は、離れて眺めるに宜しく、又上つて遊ぶに宜しい。現にその峰の頂上まで、此頃は立派に道も開けて、女子供も樂に廻はれると云ふが、惜しいかな僕は、夕方の汽車ではもう歸らねばならない。

折から會場に集つた子供等に、三十分許りの野外口演をして、漸く汗を催す頃、天は何に感じてか、又しても雲を綻ばす。その中を事ともせず、幾千に及ぶ少年少女が、餘興の寶探しに功名せんと、岩角、松根を漁りまはるけしきは、又珍らしい壯觀であつた。

が、其人爲の壯觀も、將た天然の勝景も、長く之を嘆賞する間もなく、やがて又船に送られて、元の陸へと歸る時、首を回らして島山を見れば、雨は煙と之を隔て、これも別れを惜しむかと……。(大正四年)

石橋君！ 丁度去年の今頃、僕は君の後塵を趁うて、會津の東山から失敬したが、一年後の今年の秋、僕は又君の會遊の地なる、木會に道草を食ひに來たから例によつて又お邪魔するよ。

是より先、木會には此夏來る筈だつたのだ。而もそれは白人會の連中と、御料林の拜觀も兼ねての計畫だつたが、その御係りの御都合で、其所から伐り出される木材が、洪水にでも會つた様に、とう／＼お流れに成つてしまつたから、その埋め合はせが、それ、君を誘ひ出しての、鹿島香取の巡拜と成つたのだ。

が、それでは折角誂へた鹽焼を、干物で我慢させられた様で、どうも蟲が治まらない。思ふ事云はざるは、腹膨るゝ業だとすれば、思ひ立つた所へ行かれないのも、腹の朽ちない業とも云へやう。

所が丁度幸にも、この九日の土曜日に、僕は松本まで行く用が出来た。それは例の膝栗毛だつたが、次の日は休日でもあり、折から秋晴の氣持の好さに、膝栗毛まではつて來て、遂にこんな所まで、道草食ひにと飛び出してしまつた。

松本を十時前に出た汽車は、木會の福島に正午過に着いた。驛の前には葛屋の支店がある。然しそこでは町が見えないから、わざとその本店へ行くと、生憎まだ普請中！ 座敷の障子が立ちきらないで、立關前に大きな穴が掘つてある仕末だ。

早速中食を誂へたが、どうせ待たされると思つたから、その間に一ト通り町見物を兼ねて、例の興禪寺の旭將軍の墓に、一寸敬意を表して來た。

此寺は君、焼けたんだネ。本堂はまだほんとは出來て居ないよ。何しろひどい火事だつたと見えて、名木の時雨の櫻も、今ぢやア大人國の消炭の様に成つてしまつた。それにしては國寶の敕使門や、義仲手植の三本檜が、よく焼け残つたと感心する。

所で、あの境内に子安堂のあるのを知つてゐるかネ。元より小さなお堂だから、本尊は地藏か観音か、それ迄まだ確めない中に、はやくも僕の眼に着いたのは、部格子にかけてあつた鬘馬だ。

や、また例の馬狂かと、早合點はすべからず、其鬘馬は皆な申合せた様に、兎の鬘がよいてあつて、側に卯年の女とある。

卯年と云やア君も然うだらう。第一今年がその卯年なのだ。所でまた、恐縮だが、僕の家にも、その卯年の女が居て、而も此頃はかう云ふ所へ、願をかくべき必要を感じて居るのだ。そこでわざとその鬘馬の一枚を、お守符代りに頂戴に及んで、彼者への土産にすべく、そのまゝポケットに入れて来てしまつた。人生親父になる勿れ！ 飛んだ所で歸依心が出るよ。

石橋君！ 君の來た時も、もう焼けた後だつたらうが、その町が四年後の昨今になつて、漸く立て揃つたと云ふのだから、土地の發展力も察せられやう。元より山間の小都會、帝室林野管理局の出張所や、木曾山林學校位ぢやア、まだこの

町の估券は上らない。

そこで近年は交通の便を利用して、専ら山水の形勝と、夏時の清涼とを以て、天下の客を惹かうとして居るのに、それにしては肝腎の旅館が、どうも商賣氣に疎い様だ。

その癖主人の應接ぶりも、女中共の款待方も、決して拙いと云ふのではないが、何しろその建物が、折角の清流を裏に閑却して、只表許りに體裁を作つて居る。

なるほど土地の者から見れば、山や水は何でも無からう。然し外から來る客には、その翠巒や清流が、何よりの所謂御目的なだから、此所に旅店を營む程の者は、山に面して樓を建て、水に臨んで亭を構へる位の、風流氣あつて然るべしではないか。

などよ君に理窟を云ふのではない。之は宿で頼んでくれた車夫とも、道々談し合つた事だが、その車夫の云ふ所によつても、此町で川添に座敷を持つてゐるのは、ほんの一二軒より無いのだとさ。折角の好い川がありながらなア。

石橋君！ 木曾名物のお六櫛、木花漬に曲物細工、これは露伴君の風流佛を讀んだ頃から、一種の印象を留めさせられたが、僕も中食をやつて居る間に、型の如く勧められて、快くその客と成つた。

思ふにあれは、宿の女中のほまちとでも云ふのか、一人から櫛を買つたら、入れ代つて他の一人から、此花漬は如何ですと來たのだ。が、その勧め方が、ひつこからず又けうとからず、大いに僕の意を得たから、つい買過ぎもしたらうと云ふもの。此處らを思ふと、巴御前は只腕力許りでもなかつたらうネ。

福島からはわざと車で、棧橋寢覺と見物に來たのだ。然るにその車なるものがまだ新しい護謨輪のそれ、東京でも場末へ行つたら、お醫者様のかと思はれさうな奴に、グツと反身に成つた所は、なるほど耳の立つた路傍の犬に、幾度も吠えられた筈だと思ふ。

木曾川の景色は、御嶽遙拜の石の鳥居の下、王瀧川の落合ふ邊から、そろく本論に入つて來る様だネ。

然し有名な棧橋の「命をならむ葛」が、今では鐵條に成つてしまつたり、其所に立てられた芭蕉の句碑が、初めの位置を置かへられて、いかにも手持無沙汰らしく、方角ちがひを向いて居るなどは、聊か探勝慾を侮辱したとも云へやう。

それに面白いのは、この棧橋の近間丈、如何にも絶勝らしく出來て居ながら、一步此所を歩き過ると、けろりと景も立ち直つて、凡山凡水になつてしまふ所はまるで袱紗をかへした様で、造化の神の現金さにも、聊か驚かざるを得ない。

石橋君！ 若し夫れ寢覺に至つては、なるほど一種の奇勝たるに相違無いネ。車夫の馴染と見える越前屋と云ふ店で、車をおり。あれから臨川寺へおりて行くと、小學の帽子をかぶつて、雪袴をつけた惻發らしい少年が、忽ち出迎へて案内に及んだ。

まづ埒に憑つて見おろすと、寢覺の床は箱庭の様だ。少年は素讀の調子で、あれが浦島堂、これが獅子岩、それから釜岩、硯岩、腰掛岩に屏風岩と、その間を流れて居る谷川の水より滑かに、指をさしながら教へてくれたが、やがて轉じて

辨天堂へ来て、例の浦島の釣竿と云ふのを、眉に唾もつけず見つめて居ると、その僕の顔を又ちつと見ながら、少年は臆面も無く、

「失禮ですが、貴君は小波先生ぢやございませんか？」

と来た、敢て微行する譯でもないが、先方からかう不意を打たれると、一寸誰もびくつくものだ。仕方が無いから、

「ハイさうです。だがどうして君に解つたネ？」

と聞いたら、「でも雑誌の口置で知つてます。」と云へ。

むかしの浦島は、此所の辨天の池へ来て、我と我が顔を寫してさへ、容易に自分にも解らなかつたのだが、僕は同じ池の側で、脆くも正體を見破られてしまつた。

それにつけても、その少年の眼の敏さには感心したが、更に谷底へと案内されるに及んで、今度はその脚の捷さに驚かされた。

上から見おろして居る時は、何の苦もなさうだつた石の上、それが實際降りて行つて見ると、靴で包んだ都人の足には、可なりの難所になつて來るのだ。

その上を少年は鶴鶴の様に軽く渡る。僕はまるで手負鶏の如く、又しても足を踏み外さうとする。少年は見かねて、僕の外套を持つてくれた。それでも僕は大汗になつて、再び元の辨天池の畔に、名水の一二椀を干すまでは、しきりに話しかける少年にも、樂に應答が出来ない位だつた。

石橋君！ 今僕は元の越前屋へ歸つて、名物だと云ふ蕎麥を食つて居るよ。これは浦島にあやかつて、命長かれと云ふ縁起だらうか。それとすると、つなぎが悪くてポツ／＼切れるのが平仄に合はない。

それとも玉手箱をあげてから後の、浦島の髻を偲ばせやうと云ふのか。それにしては如何にも色が黒い。然らば即ち何の爲めか？

僕即ち説ありだ。蓋し當時浦島は、此所まで歸つて玉手箱をあげて、急に白髪の翁になつて、大きに後悔して曰く、あゝこんな事ならば、やつぱり乙姫のそばが好いと……。

なに、古いく／＼して？ 古い筈さ、浦島は昔噺だよ。失敬！（同上）

熊野路の二日

石橋君！

先に會津の東山でも、木曾の寢覺でも、共に君の後塵を趁うたが、今度こそは君の未見の地に遊んで、所謂一日の長を誇るの光榮を有する。

聞けば君は數年前、之も同じく煙霞通なる例の遅塚麗水君と、志州の烏羽に二日も船待して、遂に渡るを得なかつたと云ふ、その紀州の熊野路に、僕は兎も角も二日遊んだ。但し僕のは烏羽からではなく、例の和歌浦からの航路を辿つたのだ。

和歌浦には名所がござる。一に權現、二に……わかつてるよくと、氣速な君はもう聞きたくもあるまい。然し聞かせなけりや成らんのは、其權現前から雜賀岬へと開けた、新和歌浦の新天地だよ。蓋し此所は二三年來の開拓、望海樓や米

榮の支店の大建築が、丁度江の島の惠比須屋式に、山を負ひ、水を抱いて居る鹽梅、爲めに舊和歌浦が、近來めつきり寂れたと云ふのでも、以て其形勝は知れやう。

其の形勝の地に一夜を明かし一日を暮らした僕が、夜の八時の急行船に乗り込んだのは、恰も陰曆十六日頃の月が、池の様な入江を照らして、天地を一幅の畫圖化した時だつた。

が、流石に霜月の夜は寒い。残念ながらその絶景を後に、夢を船室に食ふ事になると、船は日の岬をまはり、更に汐岬を越える頃は、さながら搖籃の如く動き出して、爲めに眼を凝ばせもする。

その中に一際太く唸り立つた汽笛に、はじめて枕を離れて見ると、船はゴム輪の車の様になつて、油畫の様な島山の間を、はや勝浦へと入りつゝある。

見わたすと彼方の山の端には、残の月が老女の化粧を暈くして、未練けに港を照らして居る。其時はまだ六時前。

已にして棧橋に着いたが、四邊の景色はまだ解らぬ間に、更に小船に迎へられ

て、赤島の温泉へと案内された。

島と云つても陸続きだが、交通が船の他には無いので、暫く此名を稱へずばなるまい。其所に唯一の温泉宿がある。浴場はまだ前世紀式だが、座敷は現代的の設備調つて、正に一日の神を養ふに足るのに、そんな餘裕は今は無。朝飯がすむと又小船で送られて、以前の勝浦の棧橋側に着くと、今度は更に人車に乗せられて、名にし負ふ那智の大瀧へと向つた。

那智は此所から一里半、人車で行けば一時間と掛らない。但しその人車なるものが、何れも犬の差引付だ。

これはかうした地方へ入ると、必しも珍らしいものではないが、生憎にも僕の車のが、乳房重けな孕犬ではないか。

石橋君！

僕は此間木曾へ行つた時、特に安産の霊馬を探集して来た位だ。それが今や孕犬を捕へて、むごたらしく自分の車の綱を曳かせる。心苦しきは御察しを願ひ度

い。そこで僕も幾度か、車夫に犬の解放を勧めたが、車夫は其割に氣にもせず、否、當の孕犬が亦苦にもせず、むしろ其職に安んじて居る様に、尾を振りながら得々として行く。

其途中には、また今時には珍らしい、耳の立つた日本犬も居た。然しそれは畑を守り、脊戸に番する能はあるが、車を曳くには適しないのださうだ。だから僕等の車をはじめ、入れちがひに來る荷車の先曳も、皆見事な洋犬許りだ。

已にして市野々と云ふ所に着いた。此所から勾配がつよくなるが、それでも車は通はない事はない。例の西國一番だと云ふ、那智觀音へ十町許りと云ふ所から、石段を右へ降りると、其所が那智の瀧見堂のある所だ。

那智の瀧！ 文覺の荒行！ 聞いた丈でも身は慄ふ様だ。が、實際行つて見ると、君これは案外だよ。

なるほど高いには相違無い、又決して小さいとは云へない。然し山が浅く、落ち口が露骨で、瀧坪にも凄味が無いから、何だか大きな庭へでも行つた様に、壯

嚴とか崇高とかの念は、何うも生憎起り兼ねる。

先年僕はナイヤガラの瀧を見た時も、丁度同じ感じがしたが、山高きが故貴からず、木あるを以て貴しとなすなら、瀧も亦只大なる許りが、決して貴くは無いとも云へやう。尤も今は霜枯時だ、水量が大分減つて居たからと、土地の人は辯解もして居た。それ丈は僕も認めては置く。

さて文覺の行場はと聞くと、之は此所からは下流にあたる、小さな瀧の方だと云ふ。なるほどこれなら文覺でなくても、敢へて難しとするに足らずだ。但しそれは暑中の事だよ。

那智見物をすまして、再び勝浦へ引かへし、此所から汽車で新宮へと向つた。其間には那智の停車場がある。補陀落寺は此所にあるのだ。「岸打つ波の」の御詠歌は、此方も一緒に籠めたものらしい。

それから、宇久井、三輪崎などよ來たが、總じて此沿道は、なまじ汽車の便をかりるより、急がぬ旅なら徒歩で行くべしだ。正に名所や絶景に富んで居る。例へ

ば神武天皇が、はじめて船から上がらせられて、御手を洗ひ給うたと云ふ所、或は平の維盛が、此所まで來て進退谷まり、(實は海より)遂に身を投げたと云ふ大巖、其他曰く何、曰く何、算へ立てたら日も足るまい。

その中にもう新宮に着いた。停車場はその町外れにある。

が、その停車場間近くなつて、一寸畑を見おろした所に、見逃がす可らざる物がある。それは秦の徐福の墓。始皇帝の命を奉じて、不死の藥を此所に探つて、却つて不歸の客となつた、其の名残を留めた所なのだ。今見ると、一基の墓石に、二株の枯木が、只凜しに弄ばれて居る許りだ。枯木は樟だと云ふ事だが、今は大々的の白珊瑚樹の如に、只白々と洒れきつて居る。

それに反して、此墓の背景とも云ふべき、彼方の蓬萊山の茂みは、今も翠嶺んとして、何さま不老の姿を備へて居る。此山は名も容も、あの大磯にある高麗山によく似て、如何にも由緒めり氣な山だ。

その山の左に隣つて、小高く成つた所が丹鶴城だ。これも立木に富で、正に町の

風致を添へて居る。が、停車場を出た許りではまだ新宮の町は解らない。只その正面の高地に、此地方には珍らしい、ハイカラな木造の洋館が聳えて居る。一體誰の住家かと、懐かしさに聞かうとする間に、それこそ僕の宿と定められた、蘆家西村伊作君の家だと云ふ。

西村君の作は、此間の二科會でも一見して、蔭ながら其人は知つて居たが、今其家の客にならうとは、昨夜の夢にも知らなかつた。

車に乗せられる迄もないと、徒歩でその坂路を攀ぢると、はやその家の前に出たが、西村君は瀟洒な稿の脊廣姿に、偉大な體軀を包んでその立關前まで出迎へ、初對面の挨拶も無造作に、そのサルーンへと案内して、更に細君にも叔父さんにも紹介し、やがて夕方の食卓にも、此等の人と椅子をならべて、洋食に舌を鳴らす事となつた。

石橋君！

新宮は其名の如く、新味に富んだ所だよとは、取りあへず飛ばせた蘆葉書に書

いたが、全く此所で此様な家に迎へられて、セ、ツシヨン式の窓掛の間から、市街越しに大洋を眺め、家庭の人達と卓を共にして、洋風の晚餐を饗せられた許りか、夜は階上の一室の、新しいシートで包まれた、ベッドの上に眠らせられた時は、何だか亞米利加の西海岸を廻つて、只ある別荘に客となつた様な氣がした。此地は南國の温帯を占めて、山と云はず、畑と云はず、例の柑橘が時を得顔に色づいて居る。岩礁に富んだ海岸の彼方は、只渺茫たる大洋である。それに斯した洋風新築に宿つて、洋風の寢室に休ませられたら、偶々ベルを鳴らした時、ノックをして入つて来るメイドの、和服に前垂掛なのが、むしろ不調和と云ひ度い位だよ。

かうした家に、僕は二日厄介になつたのだが、着いた晩を初めとして、次の日は朝から夕方まで、前後六回に渉る講演で、舌栗毛も流石に汗ばんだ。然しその間を窺んで、まづ新宮の所謂新宮たる、速玉神社に参拜し、次いで熊野川の夕景を賞すべく、船を泛べるの餘裕はあつた。

速玉神社は君も知る通り、今度の御大典に際して、今迄の縣社から、一足飛に官幣大社に陞格したと云ふ、頗るおめで度いお宮なのだ。一の鳥居から入ると石疊が鍵の手になつて、右の奥に本社がある。左して莊嚴と云うでもないが、構造が何となく神寂びて居て、如何にも貴とけに仰がれた。殊に驚いたのは、その神木が竹柏の大樹である事だ。竹柏は佐々木大人の園號にこそ知られるれ、それにこんな大木があるとは、實は今まで知らなかつた。根元での直径は正に五尺、梢は數丈に及ぶだらうよ。

このお宮を裏へとまはつて、其所から河原を二町ほどゆくと、船の用意してある所へ出た。此東道は鹽崎氏と云つて、今日の晝餉を御馳走してくれ、又紀伊續風土記と云ふ、珍書を贈られた篤志家である。

船はやがて河原を離れた。其時首を回らすと、杉と樟とで持ち切つた、速玉神社の神苑の森は、鬱蒼として萬古の翠を湛へ、其後の神倉山は突兀として夕映の空に聳えて居る。是等を後景中景として、さて前景の白い河原には、塙へ歸りを惜

んだ鴉が、まるで碁石をちらかした如く、無數に下り立つて餌を漁つて居る。

起證一枚書く度に、熊野鴉が三羽宛死ぬとは、昔から聞き及んだ事だが、その鴉共が人をも恐れず、かう大勢群れ遊んで居る所を見ると、此頃は人間も伶俐になつて、公證役場をこそ煩はせ、神を相手の起證三昧は、一向はやらなく成つた爲かも知れない。

船はしばらく上流へと進む、右手の岸は三重縣だと云ふ。その少しくねつた所に、龜島、御船島などの名所もある。それからおともの渡船場を過ぎると、左の岸が忽ち屏風の様になつて、其下の水の色は、まるで藍壺を覗く様に見える。同乗の沖野五點君、これを瀨八丁の見本として、まづ此處で諦めよと云ふ。何しろその瀨を見て歸るには、何うしても二日を要すると云ふので、残念ながら此所で引返した。

さて歸りには、熊野川を丹鶴城の下まで降つた。此時見ると、右手の河原には、掘立小屋の様な物が幾棟となく建ち列んで、殆んど小市街の觀がある。これが又

此地の名物で、即ち此川を上下する者の爲めに、古來から設けられた河原市である。出水の時は何うするかと云へば、馴れては其所に如才があらうか。それと見ると家を疊んで、さつさと本地へ引揚げるのに、蝸牛の殻を負ふ如しださうだ。丹鶴城は、紀州の家老水野氏の居城だ。元よりあまり大きくないが、頗る景勝の地を占めて、町の公園に最も適當の所だ、今はまだ一個人の有に留まつて、一向何等の設備も無く、却つて目ざはりのペンキ作りの塔があつて、風致を害する事夥しい。

然しその塔を背にして、木の間から見おろすと、熊野川は洋々として、目の下に白銀をのべ、その川口に林立する帆船は、會て石井栢亭君の手にもかよつて、文展に賞を得た丈あつて、何様好個の書題と點頭かれた。

此等の勝を探る中に、日はもうすつかり暮れてしまつた。そこで夜はカフェーミドリヤと云ふ、新式のレストランの歓迎會に招かれ、沖野幹事の紹介によつて、町での有志家五六十氏に會つたが、その獻立が、石橋君！ 又頗る振つたも

のだったよ。

まア最初が菓子に果物、それにビヤやサイダーが出ると、直ぐに五目餅の折詰が配られた。さて、之でおしまひかと思ふと、フライが出る、シチュウ(?)が出る、オヤ／＼／＼と思ふ中に、今度は日本風の椀盛が出た。蓋をあけると山の芋のスープ、ザット、イズ、とろ／＼汁だ。石橋君！ 君も可なりの食通だが、かうした御馳走に會つた事があるかい？ 但し新宮の新しい所は、こんな所にも味はへるのだ。

さて次の朝は、再び輕鐵の御厄介になつて、勝浦からまた船に乗つた。但し出發は午前九時半、船は姫川丸と云ふのだつた。

往には夜行であつたから、折角の途中の佳景も、夜の錦と過ぎしてしまつた。が、今度こそは日のある間に、十分觀光の慾を充たすべく、まづ甲板のベンチを占めた。と、昨日見た那智の瀧も、あれよと山の一角に指される。

然るに勝浦の灣を出ると、間もなく船は動き出して、そしてそれが一時間許り

遠慮なく揺りつどいた。同じベンチに陣取つた、大阪者らしい婦人連は、那智詣の歸りと見えて、お山でいたどいて来た御詠歌の本をあげて、さかんにそれを唱へはじめた。更にその隣のベンチには、勝浦のそれ者らしいのが、はや生體無く倒れ伏して、横ざまに吹く潮風に、裾の赤い所まで吹きまくられながら、それをかき合はす勢もない始末だ。

僕だつてあまり好い心地はしない。然し景を見残すまいと云ふ、探勝慾に船暈を驅つて、名高い橋杭岩も見物した。岩はまるで齧齒の様に、岸から列をなして居る鹽梅、造化の妙も稱へられる。

串本から潮岬をまはつて、田邊に着いた頃は波も静つた。船から見た湯の崎、鉛山、此邊には小島も多くあつて、何の事はない、片側を大洋にした瀬戸内を行く様だ。

日の岬をまはる頃は、もう日が暮れてしまつた。往く時はまだ圓かつた月は、此時はもう瘦せを見せて、雲の間から遠慮勝に顔を出す。

又しても汽笛一聲、舳ははや和歌浦へと曲つて、今宵泊まるべき新和歌浦の、例の米榮の別荘の灯は、待ちわび顔に瞬いて居る。(同)

東北瞥見記

目

鐵道俱樂部の家庭會——東照宮の荒廢

水戸停車場は、常磐線中隨一の大きなものだ。随つて之に關係する吏員も大勢居るので、その官舎の構内に鐵道俱樂部なるものが出來て居る。それ丈は別に珍らしくも無いが、新たに家庭會が組織されて居て、婦人子供にまで俱樂部の利益を分配して居るのは、蓋し此所が嚆矢であるとは、今野保線課主任の話だ。●此所の東照宮の甚だ振つて居ないのは、必ずしも勤王論の爲め許りではあるまい。殊に境内の老杉の、煤烟の爲めに惱まされて居るのが、上野のそれと似て居るのも、何だが因縁らしく見える。(水戸)

火災保險の歡迎地——人物製造の都——儒耶佛兼宗の門

仙臺は大きな村だと云ふ。成るほど樹木があり過る様だ。随つて火災が少くないのを、土地の者は誇りもし火災保險では喜ばれるさうだが、そのために又焼けほこりの發展も見られない。と、一方で慨嘆して居る者もある。●曰く縣廳、曰く控訴院、曰く師團、曰く大學と、此位勅任官の多い所は、地方の都會には少からう。随つて博士や學士の數も多い。由來仙臺は、商業に適せず、工業も進まぬが、その代り教育が進んで學校は盛んにある。だから此所では産物を造らず、むしろ人物を造る事にしたとは、早川教育會長の氣焔だ。●早川氏は年古稀を過て而も尙矍鑠、仙臺中の子供等から、をぢさんくと慕はれて居るほどの、獸身的の教育會長である。●東華女學校の構内に、小さな孔子廟がある。此門は、會て寺院の前に立ち、後基督教會の表にも据ゑられたが此頃再び舞戻つて、本廟の前に建てられたのだと云ふ。儒耶佛兼宗の門とは是だらう。(仙臺)

堀出し物のラヂウム——陰徳からの陽報泉——解熱の善塚

東北瞥見記

飯坂は東北での勝地、一寸箱根に似て居るが、山の浅いのと、遊廓の出しやばつて居るのが瑕だ。その代りラヂウムと云ふ結構な物が発見されたので、前途頗る有望である。現に路傍の或る井戸の如きは、ラヂウム含量の多い爲めに、やがて一升三十錢位にならうと、堀切町長は得意がつて居た。●此町長の本家だと云ふ、堀切粹平氏の別荘は、摺上川と赤川との、落合に面した勝地にある。主人公の慈善心から、土地の者を恤はす爲めに、試みに湯坪を掘らせたら、見事に泉脈に掘りてあてよ、今は立派な浴場になつて居る。土地の字を其儘、これを小瀧の湯と呼んで居るが、元が主翁の陰徳から出たのだから、宜しく陽報泉とでも命名すべしだ。●飯坂から十町許り離れて、醫王寺と云ふのがある。此所は佐藤繼信、忠信の遺跡で、その兄弟の醫塚が残つて居るが、無残や散々に打ち缺かれて、文字はどさつぱり讀めぬ。何でも瘡病に利くのださうだ。觸ると熱が出ると云ふ、塚の崇りの話はよく聞か、却つて解熱の奇持があるとは、一風變つた塚と云ふべしぢやないか。(飯坂)

劍客知事に軍人市長——青年の養蠶——煤烟を振まく輕便鐵道

福島は面白い所だ。知事西久保氏は大の擊劍好きで、毎朝五六本ヤットウを極めてからでなければ、縣廳へ顔を出さぬと云ひ、市長二宮氏は豫備大尉だけに、夏冬ブツ通しのカーキの詰襟服で、何様な所でも出かけて行く。劍客知事に、軍人市長!! ●そんなら武張つた所かと云ふと實は工藝の盛んな土地で、産業學校などを覗いて見ると、十八九からの立派な青年が、皆丹念に蠶を飼つて居る。●小さな機關車をくつよけた、例の輕便鐵道が、市内に煤烟を振りまいて廻るのは、あまり感心するものではない。水力もある筈の土地なら、速く電車にしては何うだらう。(福島)

廿年來に三倍の發展——電燈の普及、水道の新設——開成館の
 珍建築

郡山は福島と、縣廳を争はんとする程の所だ。現に長者議員の競争もやつて居る。何しろこの二十年の間に、人口が三倍したと云ふのを聞いても、その發展の程が想はれるでないか。●電燈は已に家毎に點けられ、水道もやがて全町に引かれやうとして居る。土地は若いが、それ丈元氣も充ちて居る様だ。僕は實に此所へ來た時、米國の新市街を見た時の様な感かした。●桑野行在所の遺跡だといふ、開成館の建築は、明治初年の佛を、遺憾無く留めて居る。實に珍とすべきものだ。(郡山)(明治四十三年)

足尾 覗

東北三縣の斷け廻りに、三斗の汗をしほつた舌栗毛は、十分飲ふ間さへなく、再び一鞭九十哩を飛んで、五月三十一日と云ふのに、野州は日光の裏山、足尾の銅山へと乗り込んだ。

十一年ぶりで降りた日光停車場は、さして當年の面目を改めては見えぬが、變つたのはその停車場から、今は電車の便のある事である。

電車は参向道を一直線に、神橋の側から山近く進んで、清瀧から岩の鼻まで通じて居る。中禪寺まで二里の帳場も、其中には延びるのであらう。

足尾へ行くには、人力車で細尾へ來て、其所から更に興の御厄介になるのだが、清瀧には製銅所あり、細尾には發電所があつて、既に銅山王の勢力範圍を認めしめる。

細尾峠は三重だと云ふ。徒歩でも二時間あれば造作は無い。但し荷物は鐵索に托すと、忽ち宙乗の奇藝を演じて、主より先へちやんと届いてしまふ。

海拔三千九百餘尺と云ふ。この峠の頂上には、型の如く一軒茶屋があつて、型の如く力餅を賣る。其邊總て月並式だが、聞けば二百年來の舊家とやらで、其板間の黒光りさ加減、實に板屋の名を辱しめない。

峠は足尾口にかよるほど急だが、景色もむしろ此の方が好い。殊に渡良瀬川の水源とも覺える、只ある瀧の落口などは、輿を停めて坐るに愛するに足る。

栃木平からは、又乗物が變つて、今度は鐵道馬車になる。これから足尾の町までは、渡良瀬の上流に沿うた平地で、折からの新緑を賞し、時に杜鵑の聲を聞きながら、約一時間半にして、古河鑛業事務所の前に出る。事務所は山間に不似合な、新築の大きな西洋館、何だかホテルの様にも見えるた。

一口に足尾と云ふが、通洞、間藤、小瀧等に別れて、それ／＼に市街を成て居るのだから、一寸一ト目で見たり許りでは、人口四萬の都會とは受取れない。

渡良瀬に法藏寺と云ふ寺がある。馬車の上からその地内を見るのに、一六流の墓碑や塔婆が、其所にも此所にも立つて居るでないか。懐かしさに聞いて見ると、住職山田貫善師は、先人の弟子であつたのださうだ。

足尾と云ふと、直ぐ鑛毒問題を連想する。所がその鑛毒も、今は完全な濾過池の設備で、全く痕を斷つたさうだ。然し精煉所から吐き立てる煙は、四邊の樹木を煤び枯らして、その近所は殆んど青い物が見られない。

本山から小瀧までは、試みに坑内を通つて見た。二人乗のトロツコに、赤毛布でくるまつて乗つた圖は、正に達磨の地獄廻りと云ふ格だ。丁度六月一日で、坑夫の公休日であつたに拘らず、特に熟練の技手を派して、新鋭に採鑛の實況を見せてくれた。坑場長の好意を謝せざるを得ない。

小瀧の坑場長江刺氏は、二十八年も勤続して居る有数な人望家だけに、部下の氣風も大いに良いさうだ。八犬傳で名高い庚申山は、此所からはもう直きだと云ふ。それなら折々は山猫でも出るかと、戯れに坑場長に聞いたら、イヤ山猫はま

だ見かけないが、此間鹿を生捕にして、今では山神の社内に飼つてあると話した。此所には又奨學會と云ふ者が設けてある。云はゞ保護者會に似たもので、學資の不足な工夫の子弟に、修學旅行の費用を與へたり、教科書や器具を支給するのを、専ら此會の仕事として居る。即ち僕は此會の依頼で、やがて小瀧小學校に臨み、運動會の休憩時間に、野天で一席の講話を試みた。

小瀧から通洞へは、又例の鐵道馬車で歸つた。今度は庚申山川に沿うての下り路、これも棄てた景色ではない。今に大間々からの汽車が通じれば、此邊へ來るのだと云ふ所も見た。

山中唯一の劇場、金田座で開かれた、少年少女の大會には、午後三時から臨んだ。場内殆んど満員、約七百と算せられた。併し歸りを急いだ爲めに講演の後間も無く出たので、少年連の劍舞やら、少女連の對話などは、惜いかな見洩らし、聞き洩らした。蓋し此土地の風として、少年少女に藝事を仕込むのが、何の家庭でも流行るのだと云ふ。

かくて足尾にある事一晝夜、昨日入つた時刻に又此町を出て、峠に掛つたのは九時過ぎ、只見れば新月鉤の如く、彼方の岩の一角に懸つて、何所でやら鳴く閑古鳥。——生憎一句も出なかつたのを憾む。

終電車に間に合はず、遂に清瀧の丁田屋に轉け込んだ。但し却つてそれが幸ひ次の朝の新緑の眺めは、なまじ日光の町に泊まつたより、どれほど眼を養つたか知れない。

六月二日は東照宮の大祭、その行列の連中であらう、面を被つた小童やら、具足を着けた大供の、チラホラ見えそめる朝の町を、例の電車で素通りして、再び元の停車場へ歸つたが。ざるにてもこの祭日に、思つた程の混雑も無く、軒に提灯の影も無ければ、門に注連の翻りも見えず。只町役場の立關に、町長らしい役人の、フロックコートで控へて御座るのが見えた。(同)

人見る旅

▲顔に穴

僕も可なりよく旅をする男だ。今年も上半季の日記を繰り返して見ると、随分方々廻つて居る。然しそれが多くは講演旅行だから、折角の名所舊跡を過ぎりながら、観光慾を堪能させずにすまず事が多い。

尤も山水に親しむ許りが、強ち旅行の目的でないとするれば、僕のような旅の仕方、人見る旅として又一興ではあるが、その人も一時に五六百から二三千まで、一堂に集めて見渡した丈では、ろくな人間観察も出来ず、却つて此方が見られにまはる様なもの。日に一萬近くの眼玉に見詰められて、よくも穴だらけにならないかつたものと、歸る度に鏡に對つては、我と我が頬を撫でざるを得ない。

▲豪傑の水中往生

正月は名古屋へ行つた。それはいとう呉服店で、例年の新年お伽會があつたからだ。

所が丁度その當日、例の寒中水泳の大豪傑某なる先生が、熱田の築港で實演すると云つて、新聞でも書き立てれば、辻札にもさかんに人目を惹いたものだ。

すると又何うだらう。その豪傑先生、前日の豫行には、見事見物を呻らせておきながら、いよくと云ふ當日の實演には、忽ち心臟癱痺を起して、さりとて呆氣無い往生、百日の説法も、水の中の屁一つ、泡となつて消えてしまつた。

後に此事を、養真會の藤田靈齋氏に話したら、

「あれは外皮のみを無上に鍛へて、内臓をまるで鍊らなかつたから、却て健康の不平均を來たして、遂にあんな結果になつたのです。」と云つた。

更に又静座法の岡田君に聞くと、

「イヤ、あの男には丁度死ぬ前に、私も電車の中で會つたが、明日は寒中水泳をやる」と云つてたから、君の様に蒼い顔をして居て、そんな馬鹿な真似をすると死んでしまふぜと云つてやりましたら、いやな顔をして居ましたが、その言が偶然言ひ當つたので、今更氣の毒でなりません。」

と云ふ事だ。

蓋し彼先生は、曾て藤田氏にも聞き、岡田君にも付いて、大いに心身を鍛錬する心算だつたのが、なまじ我流の強壯法に據らうとして、却つて失敗したもので、しい。

▲子供の輕業

これも名古屋での事だが、彼所の國技館で開演中の、大竹一座の曲藝なるものを見た。十歳未満から十八九迄の少年少女が、頗る奇抜な曲藝を演ずるので、連

日連夜の大人も、全く無理ならずと點頭かれたが、中でも下から五六丈もあらうと云ふ、高い空中にシーソウを掛け、それに十歳許りの二人登つて、巧みに種類の輕業を演ずるのは、正に見る者の膽を冷させた。が、その演ずる子供自身は、さながら平地にある如く、むしろ其藝を樂む者の様に、平氣で無造作にやつてのける。否、その平氣、無造作な所が、またその藝の成功する所以でもあらう。

近所に篤志の醫者があつて、怪我があつたら無料で療治してやらうと、毎日其所へ出張つて居たが、遂に一度も手を下だすに及ばなかつたと云ふ。實に虚心平懐と云ふ事は、なまじの細心努力より強い。

▲中學教育の象徴

上州の富岡は、有名な妙義の山麓、例の模範製絲工場のある所だ。其所へ行つた序に、富岡中學校へも行つて話したが、此所も今の前田侯爵の出身地で、校舎は即ちその舊殿を用ゐて居る。敷臺造りの大立關、床間附の校長室、總べて當年

の佛を留めて居るのに、寄宿舎は又兵營式で、生徒は皆寢臺に寝る様になつて居た。一面國漢文に頭を悩まし、一面英會話に憂身をやつしつゝある、今の畸形の中學教育を、また象徴した様で面白いと思つた。

▲校長の學生觀

五月には常磐線の平町へ行つた。此所の磐城中學の桐谷校長は、先に福島の中學に居た人で、中學教育には經驗ある良先生だ。

此先生の話によると、在校中に優等生だつた者は、卒業後却て母校を忘れ勝になるが、學生時代にさんざ世話をやかせた、所謂不良の者の中に、退校後却つて師恩を懐ひ、屢上禮狀をよせる者が多いと云ふ。僕は之を聞いた時に、大いに思ひ當る事もある様に感じて、その校長の學生觀に、私かに敬服したのである。また此中學には、僕が早稻田大學で教へた事のある人が、二人まで教鞭を執つて居り、其人達がわざわざ宿まで尋ねて来て、いろいろな話をしてくれた。

其人達の話によると、此土地の學生は商人的で、兎角利害の打算に敏く、悪く云へば勘定高い傾があるさうだ。

近所に炭坑を多く控へた、商業地たる平町の子弟としては、成る程さもありさうに思ふ。そしてさう云ふ傾向は、武士道主義から云つたらば、或は顰眉すべきかも知れない。然しいくら軍國でも、戦争は武器許りでも出来ないとするれば、かうした商魂も大切であるまいか。

▲北陸の乃木さん

加賀の小松の中學では、又愉快な老先生を見た。

只見る年紀七十に垂んとして、澁紙の如き顔に、銀絲の様な髯を生やし、鼻は高く秀で、眼は凄く光つて、如何にも古武士の佛ある上に、カアキーの軍服を着けて居るからは、如何見ても旅團長以上、事によつたら醫までも頂いて居る、後備の將軍なるべく思はれるのに、肩を見ると驚く勿れ、金の星が只一つ。蓋し少

尉殿であるのだ。

少尉殿姓は中村名は速見、正八位にして勳七等、此校創立以來の體操教師兼生徒監として、蓋し此地の名物男だと云ふ。

此人老てますますく鬢、身を持する頗る勤儉、生徒を禦する事又頗る峻嚴、この爲めに在校者は、時には怨嗟の聲を發するが、一旦卒業してしまふと、初めて此人の誠意を感じて、誰も其徳を稱へる様になる。

實にかう云ふ人こそ、後に銅像となつて校庭を飾るのであらう。僕が戯れに、「北陸の乃木さん」と評したら、「イヤもう此所でもさう云つて居ます」と、土地の青年の一人が答へた。

▲記念日問題

此小松に行つた時は、丁度海軍記念日であつた。

この日は各中小學校で、生徒が海軍談を聞かされる筈なのに、一向さう云ふ様

子も見えず、海軍には殆んど縁の無い、僕等一行の話聞くべく、貴重な時間を費やして居る。

聊か不審にも思はれたので、後に郡役所の人に質したら、

「實はある年の記念日に、わざわざ遠い某鎮守府から、參謀將校を迎へて話してもらつたのです。所がその人が、あまり巧くもない辯舌で、子供には一向解らない専門談を、而も二時間半に涉つて、休み無しに喋りつゞけたので、生徒は倦む、父兄は疲れる、果は氣分の悪くなる者まで出來て、甚だ迷惑を感じたから、それ以來教育者も申合せて、たとひ大切な記念日でも、適當な講演者が無ければ、必しも海軍談を聞かすに及ばぬ事にしました。」

と、かう云ふ答を得た。

さう聞いて見ると、これと同じ例は、僕も今まで方々で聞いた。現に東京の近縣では、聴講中に二三人の卒倒者を出した噂もある。折角の海軍談も、かうなるとむしろ中毒性を帯びて來る。随つて、本來海軍思想を注入すべき目的が、却つ

て海軍を呪ひ使もなる様な、反對の結果を來たしはすまいか。

此地方の教育者が、はやくも其點に注意を拂つて、杓子定規に囚はれず、此日の講演を任意にしたのは、大いに敬服の價があらう。

▲血染のレール

富直線の東岩瀬と云ふ驛は、先年善光寺の團參の一隊が、汽車衝突で大慘害を受けた所だ。

土地の有志は之に同情して、せめては其亡靈を弔ふべく、遭難の場所に大供養塔を建てる事にし、善光寺でも大いに之を賛して、現に大勸進の手に成つた大石碑は、見事出來上つて居るのだが、イザ建立と云ふ場合になつて、鐵道院が承知しない。

それは場所が驛内である爲めではあるが、兎に角そんな物を建てられては、鐵道院の生恥を、永く後世に遺されるのだから、死んだ亡者は浮ばれやうが、生き

た役人の頭が上らず、その上此後此所を通る、旅客に不安の念のみ與へて、甚だ面白くあるまいと云ふにある。

有志者の側から云はせると、

「イヤ、かうして記念の塔を建てよおけば、今後當事者の警告にもなつて、却つて役所の爲めではあるまいか。それを下手人たる鐵道院が、かう云ふ殊勝な企畫を、邪魔するとは甚だ其意を得ぬ。」とある。

双方に一理窟はあるが、長い物にはまかれろの譬、今にその大きな石が、路端に轉がつた儘であるのは、甚だ醜しい次第であると、町の助役の犬島君が、富山の宿へ來た時の話だ。

すると、此話を聞いて間もなく、新聞に又大椿事が見えた。それは盛岡中學の修學旅行團が、轉覆列車に引ずられて、五町許のレールを血染めにしたと云ふ、聞くさへ身毛の慄つ話だ。

僕は前の話が、まだ耳底に消えない中に、又この記事を目にしたのだから、一層感度を深からしめた。知らず鐵道院の當局者は……僕もよく旅をする者丈に、殊にこの事が氣になるのである。

▲美髯の新聞配達

陸中の國花巻は、南部藩の舊領である。この秋、茲に通俗教育會があつたので、僕はそれに招かれたが、會にはまだ時間もあるので、其間案内の人に導かれ、旭日橋の邊まで散歩した。橋は有名な北上川に架つて居る。欄に倚つて上下を見渡せば、船一隻もない大河の面に、秋の水の漣立てながら、音も無く流れ行く景色は、僅に雪を頂きながら、泰然として動かぬ岩手富士と共に、東北人士の沈着さをも、何うやら表象して居る様にも見えた。

其歸り途の事である。とある辻へ來かよると、彼方から異形な新聞配達が來た。メリヤスの襦衣に古びた縞羅紗のズボン、頭には色の變つた夏帽子、足には紺の

脚絆に草鞋、むしろ牛乳配りとも云ふべき扮装だ。其癖風采はと見ると、大學目薬の看板が、生きて脱けて來たかと思はれる、聚頭美髯の堂々たるもの。

見るから不思議に感ぜられたが、それが僕の案内者を見ると、ヤアと云つて挨拶するの、此方からも帽を取つて、さも懇意けに禮を返した。

これにいよく好奇心をそよられて、その美髯の配達人が、忙しげに行き過ぎた後、案内の人に聞いて見ると、これは性を齋藤と云つて土地での名物男。家業は果樹栽培と、東京新聞の取次であるが、其新聞の着くが早いから、主人自ら停車場へ受取りに行き、その歸途に直ぐその足で、かうして各戸へ配つてまはるのだと云ふ。蓋し新聞を購読する程の者は、一刻半時を争ふ者だから、雇人なぞの他手に托しては、どうしても粗略になつて、讀者の意に充たぬのおそれ、かうして自ら草鞋穿になつて、一軒毎に配りまはる事、雨雪の日とても變る事は無いのだ。

それにすつかり感心させられた僕は、後に講演會場で、親しく其人の訪問を

うけて、而も手作りの西瓜を贈られた時、その美味に又二度感心し、更に三度目の感心したのは、不折崇拜の結晶物たる、その漫畫帖を見せられた事だ。

帖は數百頁に及んで、苟も不折氏の手になつた者は、新聞雜誌のスケッチ類まで、皆複寫して張り込んであり、現に不折氏自身も、感心の餘り題字まで添へて居た。

▲野に遺賢

古書にも野に遺賢在りと云つて居る。蓋し篤行の君子は、都會に年々乏しくなつて、僻地には尙多くある様だ。

同じ花巻の花城小學校に、照井先生と云ふ訓導がある。先生は在職二十二年に垂んとする間、殆んど一日の如く、朝は雀に先だつて校門に入り、夕は鴉に後れて講堂を去る。年中二食の簡易生活をして、一身を育英の犠牲に捧げ、少しも倦む色の無いのは、實に敬すべき人だと云ふ事だ。

其後信州の松本では、久しぶりで例の三村校長に會つた。此人は全國でも有数の故參の小學校長、已に奏任待遇であるが、見れば破れたる古背廣に、汚れたるカラア、曲んだるネクタイ、兵隊靴をボコムくさせて、少年團の少年等に伍し、相變らずの元氣を以て、何くれと世話を焼いて居たには、少からず敬服した。

更に近頃和歌山へ行つて、あの議事堂でお伽噺をした時、縣視學の紹介によつて、又敬すべき人に會つた。それは日高郡の某所の校長で、千葉英吉と云ふ老先

生である。先生の家は十津川に近く、彼の維新の當時には、勤王の志士にも宿を借し、共に大志を語り合つたのださうだ。

その縁故によつて、當時の志士の、後に宮中の大官に成り上つた某氏から、屢屢榮達の道を設けて、出京仕官を勧めて來たが、此人は何時も斷然之を斥け、身は山間の僻地の一校長たるに甘んじて居る。

かくして在職四十年、幾多の人才を養成したか知れない。これを思へばなまじ

人爵に身を腐らせて、却つて世の胡蘆となつた、宮中大官の某々等よりは、何れほど貴むべきか知れないではないか。

▲短氣は損氣？

世の胡蘆と云へは、序に書き度い事がある。その和歌山に向ふべく、急行汽車に乗つて、京都驛を通つたのは、丁度御大典後五六日の事であつた。

一時なら芋を揉む程であるべき停車場も、此日は已に静かになつて居たが、恰も僕と同じ車室に、一人の老紳士の乗り込んだのを、窓側まで送つて来た紳士があつた。

半折帽子を大きな頭に載せ、インパネスに太つた體を包んだ様子、何さま懐中も寒かるまじく見えたが、その顔は何うやら見た様なので、私かに記憶を辿つて居る中、ハタと思ひ出されたのは、その人こそ誰あらう、一年海軍問題の火の手が、朝野の各方面に焼け及んだ時、おいらのお蔵にも火が付きさうな所を、まづ我が

ら火蓋を切つて、咽喉を二度までピストルで撃ち、而もその玉緒を断ち損つた、某男爵將軍其人では無いか。

若しあの時あのまよであつたら、此人はとても此様な所に、姿を現はすべき筈はないのだ。否若しまたあの時あのまよならずとも、例の火の手に身を焼かれて居たら、とてもまた此様な所に、暢氣に顔は出されない筈だ。

然るに短氣は全く損氣、一時の逆上も引さがつて見れば、命あつての物種の道理、今度の御大典にも御多分にもれず、参列の光榮を双肩に荷つて、只さへ重かるべきエポレットを、一層金光りに光らせたと思ふと、僕は何だか變な氣になつて来た。

そこでわざとその人の顔を、穴の明くほど見て居たが、先方では一向氣がつかず。香のよい葉巻を吹かせながら、車中の客とも話せば、ブラットホームの驛員とも、馴々しげに言葉を交はし、また同伴の細君や令嬢とも、機嫌よく語り合つて居た。

新宮名物の一つ（同）

更に當時の創痕はと見れば、インバネスの襟深くして、遂に其の所は知れなかつたが、頬肥え、膚は澤々として、これが當年の自殺未遂者とは、何所を叩いてもウンと答へやう？ではやつぱり別人かと、見直すうちに汽車は出てしまつた。

▲不平の鐘

紀州の新宮は一種特色のある所だ。其所にまた一種の奇人が居る、玉置老人と云へば誰も知らぬ者はない。

此人邸内に鐘樓を持つて居る。時を知らせる爲めかと云ふと、然うではない。老人は慷慨の人、時に時世に不平あり、町政に不満な事があれば、之を鳴らして鬱を散ずる。それ丈ならばまだよいが、偶々家人の仕むけが氣に入らず、夫婦喧嘩なぞのあつた時でも、やはりこの鐘を鳴らし立てる。これも毎度となつて來ると、今では犬も吠えないさうだ。

ヒラデルヒヤには自由の鐘、遠州には無間の鐘、これは不平の鐘として、蓋し

命拾ひの記

目

お正月の事だから、おめで度く命拾ひの話をしよう。前にも一度話した通り、僕はうせ物のよく返る質だが、丁度又その通り、命を幾度も拾った事がある。と云ふと命と云ふ物が、往來に時々落ちて居る様だが、そんな安つほい命ではない。苟もたつた一つしか無い、これが皆自分の命なのだ。

さうかと云つて、何も命を褻口同様、そよつかしく袂へ入れて歩いて居るのでもないが、兎に角命が亡くなりかけ、手取りばやく云へば、もう少しで死ぬべき所まで行つて、幾度も死なずに助かつて居る。事によるとかう云ふのも、所謂不死身の類だらうよ。

▲死神の逃出し

一體命と云ふ物は、何故か誰も一つより持つて居ない。すれば元より大切にすべきだが、それで居て、時々死神に見込まれると、急に釐末にする氣になつて、我から捨てようとかよる事もある。

現に立派な將軍で、胸は勳章の數を以て飾り、腹は巨萬の富を以て肥やしながら、何うした弾みかその咽喉へ、自分でピストルの二發までも撃ち込み、まんまと命を捨てた心算が、命の方でかちり付いて、死んだと思つたお富さんぢやないが、頸筋にさほどの疵も残らず、何時の間にか生きて居たお蔭で、今度の御大典にも御多分に洩れず、肩の大きなエポレットの上に、尙背負ひきれない光榮を荷つたのである。

他事はさて置いて、かく云ふ自分も、實は生涯にたつた一度、命を釐末にした事がある。それは丁度十六歳の評判の藤村操も、屹度あんな心地だつたのだらうと云つた所で、今になるとその心地は、あんなにもこんなにも、殆んど説明に苦しむけれど、何しろ生きてるのが否になつて、澤市の文句ぢやないが、いつそ

死んで退けようと思つた事があるのだ。

腹を切らうか、身を投げようか、いつそ鐵道往生か、と云ふと何だか都々一めくが、あれかこれかと首をひねくつた末が、古今の名案を思ひついた。即ち本當は自殺なのだが、實は過失で死んだ様に見せかけると云ふのだ。それにはそつと毒を飲んで、不慮の中毒の様に死なうと云ふのだが、その毒藥なるものは、實は容易に手に入らない。

そこで巧く考へたのは、櫛の實を食はうと云ふのだ。その櫛は墓場にある。それを取るべく青山墓地へ行つた。そして正しくそれと見た實を、三つ四つ取つて食つた。食つて見たらひどく苦かつた。そしてあまり好い氣持ではなかつた。いくら覺悟はして居ても、もう二三時間の内には、いよく此世をおさらばかと思ふと、誰だつてあまり平氣では居られまい、尤もその以前に、遺言こそ書かね、辭世らしいものは作つても置いたが。

所が何事ぞ、二三時間経つても死にさうにもなければ、又腹が痛くもならないぢ

やないか。さては食べ方が足りなかつたかと、用意に取つて來たのを又三つほど食つたが、今度も一向手應が無い。その中に寢てしまった。寢たまよ逝つてしまひ度いとも思つた。生憎とそれが又覺めた。その時はもう朝だつた。仕方が無いから顔を洗つて、ふと庭の隅を見ると、オヤ、其所にも櫛の實がなつて居る。そんなら青山まで行くにも及ばなかつたと、思ひながら尙側へ行つて見ると、何の事だ。それはかなめの實であつた。――さては昨日食つたのも、やつぱりかなめの實だつたかと、思ふとあまりの馬鹿々々しさに、我乍らブツと噴き出した。すると又その噴き出した弾みに、死神も見事噴き飛ばしたと見えて、それから心機一轉！やつぱり生きてる方が好いと云ふ氣になつて、さてこそ命を拾ひ止めたのである。

▲河豚をたらふく

河豚は食ひ度命は惜しよ！いろはかるたで夙から教へられて、河豚を食へば

キツと死ぬものだと思ひ込んだ僕は、四十歳に近い頃まで、つひにその錫の香氣も嗅がなかつた。

所が丁度ある歳の冬、九州廻りの途すがら、例の門司に親友のK氏を訪ふと、氏は特に馬關に案内して、僕に河豚の御馳走をしようと云ふ。河豚！それは少し驚くネと云へば、何も恐い事は無い。第一かうしてこの三四年來、何遍となく食つて居るこの僕が、この通りピン／＼してるのが證據ぢやないかと、云はれて見るとそれも道理。何も話の種だ。さう云ふ保證のあるからは、却つて僕には初物の、七十五日生き延びるかも知れないと、大膽にもその招きに應じたが、さてその心の奥の隅には、事によつたらこの儘お駄佛、好い旅の恥さらし、獨體と成つて故郷に歸るも、前世の約束と諦める他はないと、内々ながらも御大層な覺悟で、即ちその箸を取つた。

所は名代の春帆樓、此所のなら大丈夫保險附と、聞いて度胸の大胡座、グツと落付いて食つたわく、まつチリに味噌汁、それから生の刺身を平らけ、遂に尻尾の河豚酒まで、敢て酔せざる初陣の働きに、コリヤ大きに話せるわと、飛んだ感狀を得たものよ、實は少々食ひ過ぎはしなかつたかと、内々胸ドキの氣味でもあつた。

去る程に宴も果てよ、そのまよ又小蒸気に送られ、元の門司へと渡つて歸るのに、冬の夜の汐風は、面を刺して吹きすさぶのに、一向寒いとも冷いとも思はず、結局涼しくてよい心地だつた。

それに味を占めた僕は、歸りに再び其所を通る時、今度は大吉の中食に招かれて、其所でも亦河豚をやつた。尤も今度は煮こどりのであつた。

所が今度は生憎にも、下痢後の腸胃の穢かならぬ所へ、よい氣でつい食ひ過ぎた爲か、ひどく持病の膽石を怒らせて、腋腹の痙攣常よりも厳しく、宿の奥二階に醫者を迎へて、頓服よ、注射よと云ふ騒ぎ。あぶなく地獄の通用門を入る所を、やつとの事で踏み留まつて、ホツと命を拾ひ止めたのは、それから五時間程経つてからの事だつた。

▲肺菌の敗亡

肺結核は恐ろしい病毒、一旦其蟲に喰ひ込まれたら最期、十が八九は命を取られる事に成つて居る。さればこそ僕の長兄は、獨逸留學中にその蟲に付かれて、歸朝後十年目にとうとう斃れた。但しそれは二た昔も前の事だ。

所がまだ其頃は、その傳染の恐ろしさは知つても、今ほど微菌をやかましがらなかつた。だから僕は嫂と共に、彼の臨終まで枕邊に看護し、さていよく見送つてからは、その遺品としていろいろな物を貰つた。第一に金時計！それはまづよいとして、毛皮のついた外套や、琥珀のバイブ、赤銅の煙管、何れも病人の呼吸もかよれば、唇のついた物許りだ。

それをまた僕は、一向消毒する必要も知らず、平氣で毎日使つて居た。まだそれ許りではない。時には好奇にレスピラートルまで出して、兄のかけて居たまよの物を、自分の口に當てゝ居た事さへある。

云ふまでもなくそれ等の物には、例の微菌はベタ付いて居たらう。それをそのまま僕の口につけて居たのは、何の事はない結核患者と、毎日接吻して居た勘定だ。而も當時の僕は、今より體量も少く、胸幅も狭く、丁種不合格のヒヨロ武者であつた。それで居て、知らぬが佛の御利益か、神の御加護か知らないが、一向感染の氣色もなく、今以てかうピン／＼して居る所を見ると、結核の蟲も其頃は、醫者にあまり認められなかつた丈、それ丈幅も利かなかつたと見える。

何にしてもその時の事を思ふと、今更ゾツとすると同時に、さりとは我乍ら悪運の強さに、拾つた命の難有さを感じる。

▲命のお刺錢

チブスは身體のレボリューション！これによつて亡びる事もあるが、うまく癒れば却つて丈夫になるものだ。と、兼て聞いて居たそのチブスに、僕は四十二の厄年に罹つた。

此年は蓋し男の大厄、只さへ影が薄くなりさうな所へ、病氣にも事を更へて、チブスと云ふ命賭の大病、今度こそはやられたなと、自分でも内々考へれば、他もさう思つて居たらしかつた。

おまけにその年の正月には、下女が憧想で、屏風をうつかり逆さに立てたなどの事がある。かつぎ屋ならそれ丈でも、疾うに氣病みをして居る所を、十二月になつてこの病氣にかまつた。

年を越しても癒らない。而も一旦下つた熱が、松の内から又ぶり返へした仕末序に餘病の兆候もあるとかで、醫者の首を傾ける様子も解る。

そこで内々手帳の端に、萬一の時の注意も書いて見た。所がそれから二三週間経つと、下りかけた熱が順調になつて、元氣も何うやら恢復された。そして此病氣にはお定まりの、恢復期の食慾暴進が、僕には其割に劇しくなかつた。

其爲めに看護婦にも世話を焼かせず、漸く二た月目で醫師の手をも離れて、更に二た月轉地をして居る間に、見事前よりも丈夫になつて、果は今迄のレコード

無い、體量十六貫を超える様になつたのは、只に命を拾つた許りか、むしろお剩錢を出さなけりやなるまい。

▲線路へ顛覆

日本の汽車は殺人車だとは、毎度方々で衝突のあつた頃の事だ。

その危険時代に僕は東北から北海道へと旅をした。すると丁度那須野を過ぎた頃、汽車が名もない畑中で二十分許りハタと停まつた。而もそれが夜半の事。何の譯やらさつぱり解らなかつたが、後で動き出してから、次の驛へ来て聞いて見ると、それは前に行つた汽車が、其邊で貨車と衝突して、一寸ゴタ付いた爲めだと云ふ。それから北海道を旭川まで行つて、再び函館まで歸つて來ると、その二三日後の汽車が、暴風雨の爲めに脱線し、一部は川へ墜落までして、被害も少く無かつたのだ。

その暴風雨には、僕は會津へ來て會つたが、その時も車中に故障は無く、只歸

りに猪苗代の湖畔を、十三四町徒歩させられた許りですんだ。

車運かく返めでたかつた僕も、此秋奥州の花巻へ行つて、志土平の温泉へ案内された時の歸途には、とうくレールへ投げ出された。

これは尤も電車のレール、而もまだ開通前なので、無蓋のトロに乗せられた時の事だ。只あるカーブの處まで来ると、子供の悪戯か、大供の遺趣か、レールの上に石が置いてあつた。

上に居た僕達には、よくそれが見えたのだが、騎虎ではない騎車の勢ひ、アレヨと云ふ間に乗りかけて、トロは忽ち脱線の顛覆、乗客は路傍へ將棋倒し。

重傷者若干名と、新聞種になるべき所を、よく見ると何れも安全、只靴を脱いで居た一人が、靴足袋ごしに栗のいがを踏んで、顔を一寸しかめたに過ぎなかつたのは、むしろ天佑と云ふべきだらう。

▲海路安全

車運にめで度い僕は、船運にも蓋し拙からず、印度洋を二度、太平洋を二度、日本海も二度、大西洋を一度、地中海を二度、其他瀬戸内海、土佐通ひ東京灣、津輕海峽、琵琶の湖、霞ヶ浦、利根川と、随分大小の船に乗つたが、一度もシケと云ふものに會はない。

殊に今この原稿を書いて居る、此所を一體何所だと思ふ。驚く勿れ、紀州沖！舌栗毛を新宮まで飛ばして、その歸るさの船の中だ。

此所は近海の大警戒區域、昔は文覺上人さへ、暴風雨にあつて龍神を罵り、會て土耳其のノルマントン號が、暗礁にやられた恐ろしい所だ。

成る程この小春日和にも、船は可なり動いて居る。それでもこんな物が書ける所を見ると、命拾ひの賜物ではあるまいか。我と我が幸運を賀ふ。(同)

新實業團語

(渡米記念會樂屋落の記)

速いもので、思ひ出すとやがて四年前に成る。僕の如きも雑魚の魚交りして、所謂る平和の使命の下に、遠く太平洋と北米合衆國へと渡り、三ヶ月間に、五十餘ヶ所を、覗きまはり食倒して来たのは、實に明治四十二年の事だつた。

其後當時の實業團は解散され、團員は東西各地に別れくに成つて居るが、苟も前後百餘日、同舟、同車、同行、同宿の誼を重ねた、當時の快を繰り返へすべく、年々十二月十七日、即ち無事歸朝の日を以て、記念の懇親會を開いて居る。尤もそれは京濱在住者に限つて、今年は丁度その三回目、場所は濱町の日本橋俱樂部、午後四時からと云ふ案内だ。

一體この俱樂部は、此團員が出發の前にも、例の平和軍の行動に付いて、作戰計畫の鹿ヶ谷に當てられた位だから、此團にはなかく縁故が深い。

去年は僕病中で、生憎隨席する事が出来なかつたので、今年は勉強して出席して見た。元より日本へ歸つてしまふと、雪と炭ほど身分も職業も(云ふまでもなく財産も)差ふ僕の如きは、かう云ふ機會でも無ければ、かう云ふ連中と膝を交へて談笑する場合は無いのだ。

まづ立關へかよると、下足番は札を出しながら、

「常盤會で御座いますか。」

と聞く。常盤會とはたしか市會議員の一黨だ。そんな物に縁は無いから、頭を振つて、

「實業團の方だ。」

と云ふと、軽く頷いて、

「遊澤様の御連中！」

と奥へ取次ぐ。聲に應じて出て来た女中が、帽子と外套を剥ぎとると、直ぐ階下の一室へ案内する。此處は控所に當てられたので、即ち遊澤男爵の秘書増田君

が今日の幹事として構へた居る。また小池國三君と左右田金作君とは、もう碁盤を睨み合つて居る。雙方とも丁度洋服、かうした所は髣髴として、ミネソタや地洋丸の喫煙室を懐出させる。

所へ清水組の田邊工學士が来た。君は桑港で一行に別れてから、更に歐洲大陸へ渡つて、一年後に歸朝した人だが、僕とはかけ違つて、丁度四目年振の對面になる。爾來久澗を叙するにつけても、まづお悔みを云はなければならぬ。それはこの二月許り前に、清水組の支配人原林之助君が、急病で世を去られたからだ。原君も亦團員の一人、有名な交際家だけに、今日の様な會合には、必ず缺く可らざる人であつたにと、誰も惜まぬ者も無い丈、田邊君の顔を見る程の者は、二言目には必ず弔詞を浴せた。

已にして大橋新太郎君が見えた。君は當時同行こそせね、本團には黒幕の様な位置に在るので、かう云ふ會には例も顔を見せる。好きな道で直ぐ碁盤の横に陣取り、頻りに左右田君の肩を持ちはじめた。持たれても左右田君、今更大勢を輓

回すべくもない、四目置いて而も投げられた體だ。

此處へ中野武營君が来ると、皆から御加減はと尋ねられた。それは近頃座骨神經痛で、聊か惱まされて居る爲めだと云ふが、一つは此間の政治運動で、ややお疲れの氣味でもあらう。

處へ根津嘉一郎君が、色變りの羽織に珍柄の袴と云ふ、通な扮装で現はれた。

聞けば今日の途中、日本橋の南の袂で、荷馬車を自動車に打つけられ、車臺をひどく壊された上に、馬丁の治療代まで取られたと、大こぼしにこぼして居る。

根津君にはあの當時も、グラント、ラビッツで丁度この通りの事があつた。その時の馭者は日を経て死に、根津君は半日病院に入つたのだが、それから思ふと今日のはまだしもお芽出度い方だらう。

などよ話して居る所へ濫澤團長も着到になつたが、この話を聞くと、「イヤ自動車ではよく怪我をするよ」と、まだ繃帶中の右の拇指を見せた。それは大した事でも無かつた様だが、此春神保町でのアクシデントは、一寸世間に心配をかけた

ものだ。

「それ許りか、犬や鶏を轢いた事は、何度だか知れないよ。」

と、團長の苦笑につれて、塗替に時日を要する不便を訴へる者、修繕の日本て出来ぬ億劫を咥くもの、何れも自動車持の経験談が出た。それを聞いて見ると、側で思ふほど乗心地の好いものでは無いらしい。

其中に町田徳之助君、紫藤章君、大谷嘉兵衛君が相次で来る。紫藤君の出した岡田式の話から、原六郎君の噂も出て、あの人は全く靜座法で、あの大患が癒えたのだと云ふ者があると、その聯想から混線して、左右田君が、

「原さんは今日来ないのか」

と聞く。

「原さんが来てたまるもんか。」

と、云はれて、

「何故？」

「何故つて死んでしまつたぢやあないか。」

「オヤ、何時死にました？」

「とほけちやいけない。君も葬式に来てぢやないか。」

と、此處まで来ると漸く解つて、

「なんだ、そりやア原林之助さんだらう。僕の云ふのは原龍太（工學博士）さんだ。」

と、同じ横濱組だけに、當時の原技師長の事を云ふので、

「イヤ原龍太さんはお差支です。」

と、増田幹事が眞顔で答へる。これで話に亮かついたが、一時はトツと笑に成つた。

其中に神田男爵も見え、岩原謙三君も来、次いで堀越善重郎君も来たので、そろく餘興に掛らうかと成る。

兼て別室に控へて居た貞水、

「御話は何を致しませうか。」と、女中を以つて伺ひに出る。

「何でも可いから得意な物を。」と云ふと、「乃木大將の御事蹟でも。」と來た。

通俗講談會の席なら兎も角、今夜の客にその斟酌は無用とあつて、寧ろ十八番の角力談をと云ふお好み。

さて別席に移つて、いよく貞水の談となる。何れも最良の旦那衆、片唾を呑んで聞かうとする。貞水も手に継をかけて、例の雷電を辯じかけると、何うしたものか、頻りに咳き込んで來る。それを抑へて演らうとすると、又しても息が弾んで來る。あの名人が何時に無く、少しも正面が切れなくなつたと思ふと、遂に改めて頭を下けて、

「まことに申兼ねましたが、風邪の爲めに咽喉を傷めまして、とても席が勤まりませんから、只今代理を遣はしますまで、何卒御勘辨下されまし。」

さも恐縮した口上を残して、其まゝ脱兎の如く退却してしまつた。僕も今迄此人の講談は、方々で聞いた事があるが、今夜の様な事は初めて出會つた。蓋し貞

水自身に取つては、實に心苦しい事であつたらうと、深く同情に堪へなかつた。

此爲めに、一寸白けたが、幸に澁澤團長が、衣囊から近作を出して見せられたので、これでまた一座に花を咲かせた。

其一

遜位辭官皆護身。廟堂無復鷹揚臣。多麻水勝穎川潔。到處只看洗耳人。

其二

大正の戸ざよぬ御代にならひてや

掛けし冠のひろひ手も無し

電報通信の上田碩三君は、丁度此處へ駆けつけて、早速これを材料に書き取る。所へまた加藤辰彌君が來た。君は當年の本團書記官長、今は西園寺君の秘書官、即ち正七位殿である。

時も時、昨日侯爵が大磯から歸つて、國務引繼ぎの準備中とあるので、君は忽ち問題の中心となり、八方から質問の雨を浴びせかけられたが、例のニコ〜と

笑ふ許りで、一向要領を得させない所は、君も何うやら政治家らしくなつた。
已にして宴は開かれた。濫澤團長を正面にして、左右に居列んだ團員は、實に
十七名と註された。

岡田からと思はれる膳部は、芳町の酌人によつて配られ、三行に及ぶか及ばな
いのに、議論は又しても時局論となつた。

蓋し當代の實業界に何れもオーソリチイと目される面々、その云ふ所、論ずる
所、元より錢湯や床屋に於ける、新聞受賣の駄論とはちがふ。が、生憎く實業談
と共に、政治談にも門外漢の僕、聞いても半分より解らない。其間只耳に残つて
居るのは、濫澤團長が日本中古の歴史から説き起して、今日薩長の勢力争ひも、
蓋し偶然に非ずと云はれた事。中野君が明治初年長州に官吏として、而も政談演
説をやつた追懷談。根津君が、米價問題で農商務省と議論した事から、大橋君が
例の増師一件で、當局者に警告した頃の消息など、新聞記者の耳に入れたら、何
れも二號見出しの價値があらう。

その中に、根津君や岩原君から二代華族論が出た。座に二人より無い華族の、
濫澤男爵も賛成すれば、神田男爵も領いて居る。

次いで實業家の叙爵論が出かけると、今まで黙つて居た大谷君が、ニヤリと一
つ笑を見せて、

「イヤ、我々は子爵よりも、二階級も上ですよ。」

と云ひ出す。ソレ玄關だと思ふと、果して、

「何故なら、みんな無爵でせう。六尺は四尺より二尺上です。」

と來た。此手ではあの旅行中にも、幾人が幾度笑はされたか知れない。相變ら
ず御壯と云ふべしだ。

すると、堀越君は向側から、

「イヤ、實業家の叙爵は、西洋でも漸く此頃出來た事だ。我々の考は、丁度百五
十年も進んで居るのだから、前途まだ遠達だよ。」

と、讀書家の本領を現はして、外國の實例から論じてかゝると、團長は直ぐ遮

つて、

「なるほど前途遠く知らんが、今は草鞋穿で旅する時代ぢやないよ。自動車もある世の中だからね。」

と、云ふ時、「大きにさうだく」と、根津君はひどく喜んで居た。

やがて話題は關稅論に移り、農業論に轉じると、百姓が農事を怠ると云ふ事に付いて、堀越君と大橋君との間に、一寸見解の差異が聞えた。大橋君の説によると、日本は農地の面積の割に、百姓の数が多から、少し位業を轉じて、別段差支へ無いと云ふのらしい。

更に生活難問題になると、これも普通の労働者間には、却つて其聲は聞えない。これは物價が高くなるにつれて、自分達の勞銀も上るからだが、それよりも月給取り、それも三十圓乃至五十圓位の所が、一番苦しいのだと云ふ結論に落ちた。それでまた大橋君は、その生活難者の中に、筆を持つ者の多いのが、尤も世間を動かすのだと云ふ。これはそれに相違無い。彼等は一人で十人前も百人前も、

乃至千人萬人前の、歎聲怨語を發する力を持つて居る。

生活難に逆比例して、社會はますます進歩し、國民の自覺心は、いよいよ深くなつて來た。殊に少くとも今度の政變で、初めて國民一般が、政治思想を身に染みて感じるに至つたのは、不幸中の幸福と云つて可からうとは、誰云ふと無く、遂に満場一致の論となつた。

こんな風で、甲論乙駁、談笑にこそ花が咲け、活きた花の酌人共には、ろくに杯をやる者も無い。

一座の耳の熱する頃、中野君は中央へ出て、渡米當時の追懷談から、解團後に於ける、平和的外交上、濫澤團長の功勞を陳べて、感謝の意を表した後、更に語を改めて、故原林之助君に對して、追悼文を送る動議を提出し、異議無く通過した所で、その起草を僕に託された。

次で濫澤團長も、立つて所感を陳べられた。その間に、僕は追悼文の腹案をこしらへ、一座が飯に成つて居る間に、僕は別席でこれを書きあけて、これを一座

に披露したら、幸ひに及第したので、これは増田君に清書してもらつて、原家へは中野君から届ける事になつた。

さて飯が済むと、中央に机が置かれた。これは今夜の決議として、北米八ヶ所の商業會議所へ挨拶状を送るので、それへ一々署名する爲めである。

この英文は、加藤君が起草して、神田男の検閲を経たものだ。朝に在つては宰相に秘書たり、野に下つては實業團に書記たる、辰彌君の勤勉感服の至りだ。

この署名の間、嗜好は別席で又バチ／＼はじめぬ。話好きは茶を啜りながら辯じる。話題は岩本衆之助君の事から、有名な大阪公會堂の、建築圖案の懸賞問題になると、お手の物とおつて、今まで控へて居た田邊君が、其間の消息を洩してくれた。即ち君も應募者にして、又審査員だつたのである。

君の話によると、落選者も千圓宛の慰勞金は受けたのださうだが、それでも之に應じる爲めには、滿三ヶ月の日子と、六百圓の實費を失つたと云ふ。それを思ふと、一等三千圓の賞金は、決して香ばしい方でもあるまい。

此時上田碩三君は、何時か就を用意して來て、遊澤男に先刻のお作をと所望す。男も悪い顔をせず、繻帶のある指で、書き悪くさうに書いて居る。流石に通信社の人だけあつて、一舉兩得の拔目無さ、實業家以上と云つてよからう。

其中に九時が打つた。もう可からうと一人が立ちはじめると、我も／＼と之に續いて、茲に漸く會は了つた。

門を出れば朦朧の辻車が、よい鳥と見誤なつて寄つて來る。糞を食へ！亞米利加ではかう云ふ時には、いつも自動車で送られたぞと、腹の中で威張乍ら、ヒラリと電車に飛乗つて歸る。(大正元年)

明三稻荷の初午祭

君！此間の明三會には、惜しい事をしたネ。君が居たらさぞ喜ぶだらうと思つたよ。蓋し第二回以上の御趣向だつたからネ。

ナニ、せめて話だけでも聞かせろ！よし、それぢやア聞きたまへ！

時は大正三年の二月一日

而も正午十二時開會と云ふ觸込み。一體第三回は四月の筈だつたのが、何うして此日に成つたかと云ふと、それは此日が丁度初午で、而も日曜と来て居るから、午歳男の會合には持つて來いだ。序に出頭も午の刻の、正十二時にしようと思ふ事になつたのさ、流石に午歳だ、氣の速いのが揃つてる。

で、其時刻にはもう鼻面を揃へて、お馴染の會場紅葉館へとつめかけた。

まづ玄關で帽子を預けると

もう奥の方で、神樂が聞える。テケレッツテと云ふあの囃子を聞いては、勢ひ子供心に歸らざるを得ないネ。末社狐が化けたのではないかと、思はれる様な可愛い給仕に、長い廊下を案内されて、

あの新二階の下まで來ると

其梯子の上り口に、『明三稻荷』の幟が二三本立つて居て、右の隅には御手洗鉢に、納手拭と云ふ道具立。大きな石の鳥居を潜ると、九尺幅の梯子段が、鼠色の金巾で包まれて、石段と云ふ拵への上に、左右は松の木立の書割、ポールで切りぬいた石燈籠の外に、馬盡しの掛行燈が、左右にズラリとならんで居ると云ふ趣向。

石段を登り切つて、二階の取っ付きの一室が

即ち稻荷の境内と云ふ拵へ。また朱塗りの鳥居を入ると、杉の太木が五六本、所々に紅白の梅。甘酒、おでん、稻荷餅の店を右に見ながら、左へまはると突き當りに、また三の鳥居があつて、其奥が朱塗のお社、御供物が山の様に積んである下に、大きな催錢箱が置いてあつて、其傍に神主が一人、御幣を持つて控へて居たが、これへ参拜した者は、必ず其前の講中簿に、自ら姓名を書いた上、今日の御賽錢、即ち會費を納めると、幹事の神主が受取りの代りに、御幣でサラツとお拂ひをしてくれる。

縁側に面した方は

一切書割で包んであるから、あの長閑な上天氣にも、此處丈は晝尙闇く、只掛行燈の光の下で、おでんの横喰ひやら、甘酒の立飲に、序幕の仕出し然たること約一時間許り、頭數も漸く揃つた所で、幹事は更に別席へと云ふ。

それへ行くには何うしても、張子の岩組で拵へたお穴を潜つて行かなければな

らぬが、次の間には座蒲團もあれば、火鉢もちやんと入れてあつて、すつかり其心が變つてしまふ。長押には武智幹事の家寶をわざ／＼持ち出したと云ふ、玉章翁の三春駒の繪馬、而も明治三年の作とは、此會にして此額ありと、誰も感心せざるを得なかつた。

此座敷でお強飯が出て、お煮染を

お下物に御神酒が廻はると、やがて襦袢が取りはらはれた。見ると今までの白酒屋の店が、裏から其儘神樂堂になつて、此所で大森の間宮社中が、釣狐、兩面踊を演つたが、かうした物を真面目で見るのは、お互ひにこの三十年以來、まづ滅多には無い事だと、一廉の通人が、却つて膝を進ませて見て居る。

イヤ實にあの神樂は、ほんとに君に見せたかつたよ。

髭を生やして、眼鏡をかけたなり

乃な至いた半はん分ぶん頭あたまを光あらせたり、小こ鬢げんに胡こ麻ま鹽しほを見みせたりして居ゐる、大おほほつちやん連れんが揃そろひも揃そろつて、餘よ念ねんなくお神かみ樂らくに見み惚ぼれてる所ところは、實じつ際さいニコくには好よい口くちま靈たまだからネ。

このお神樂の餘興が濟むと

今こん度は小こ狐こねが二に匹びき飛ひび出だして來きて、お神かみ籤せん箱はこを持もつてまはつた。片かた端はしから一いっ本ぽん宛う載たいいて、どんな福ふく引びきが當あたるのかと思おもふと、こは如何いかに！第一だいいち番ばんは大だい吉きちで、一いっ座ざの者ものにお辭ひ儀ぎをさせるとか、九く番ばんは大だい凶きよう苦く勞らう性せうとあつて、お給たま仕じを負おつて座ざ敷しきを歩あるくとか、十じゅう八はち番ばんは十じゅう八はち番ばんの藝げいを出だせとか、四し十じゅう二に番ばんは厄やく年ねんの話はなしをしるとか、出で來きないものは罰ばつ杯たい付つきで、一いっ巡めぐり一人ひとり宛う引びき出だされ、其その後のちにドツと起おこる笑せう聲せいは、正ただに臍へその宿やどを換かへさうだつた。

中なかにも岡おか村むら博はく士しが、苦にがい顔かほをして焼や芋いもの

曲まが食くをやつたり、小こ山やま田だ中ちゆう佐さが軍ぐん服ふくのまよで、ニコく笑わらつて廻まわつたり、三さん上じやう君くんがフロック姿すがたで、給たま仕じに腋わきの下したをくすぐられたり、山やま本もと君くんが仔こ細さいらしく、狐きつねと三さん三さん九く度どをやつたりしたのは、大おほいに振ふるつた分ぶんであつたが。後あとから後おれ馳はせにかけつけて來きた中なか丸まる君くんが、途ちゆう中ちゆうで馬うまから落おちされて、痛いたむ脚あしを褻つ立たてながら、三さん分ぶん演えん説せつを試こころみたなぞは、むしろ同どう情じやうに耐たへなかつた。

一いっトわたり神かみ籤せんの行いき渡わたつた所ところで

ニコく社しゃから林はやし君くんが來きた。そこで再またび稻いな荷かりの社しゃ前ぜんで、例れいの庄しやう屋や然ぜんとかまへた所ところを、マグネシウムの鐵てつ砲ぱうで、見み事ことレンズズの捕ほ虜りよに成なつてしまつたが、其その間まに膳ぜん部ぶの用よう意いも出で來きたので、此こゝ所ところではじめて宴えん席せきに移うつつた。今こん度どは二に階かいの端はしの一いっ室しつ。此こゝ時ときが漸やうく三さん時じ半はんだから、西にし日じつは遠えん慮りよなく硝がらす子こを透すほす、何なんの事ことはない後あとへ行いくほど明あかるくなつて、段だん々たん夜よが明あける様やうな心こゝろ地ちは、如いか何なににも何なにかにつまよれて居ゐる様やうだ。

先刻戴いたお神籤の順で、ズラリと

蹄鐵形にならんだ所を見ると、都合二十五六人。時節柄風邪が流行るので、思ひの外缺席が多かつたが、それでも牧野(子)冷泉(子)津田(男)佐野(潔)西川(甚五郎)など云ふ、貴族院の御連中が五人まで顔を揃へ、實業界では安田(善三郎)倉知(鐵吉)山本(直良)川田(豊吉)石丸(龍太郎)田畑(大藏)などの諸君も見え、晝家では鶴城、文士では臨風など云ふ、御常連も缺けては居なかつた。

此所で又間宮の社中が、臨時に茶番を一番やつて、御愛嬌にカツボレまで添へた。聊か蛇足の様であつたが、それが神樂の著付の儘だから、又珍とせざるを得ない。

ニコニコ社から贈られた大黒天の

貯金函は、此際御神籤を福引にかへて、一座の中に頒つ事になつた。するとその

中の一個が、當る者に事を缺いて、そんな物の一番要りさうもない、安田君の所へ落ちたなどは、大黒様も味をおやりなさると、又笑の種になつた。

こんな事で興は盡きなかつたが、膳の肴は大方盡きなんとした。其所でいよいよ散會となつたのだ。時に漸く午後五時頃だつたらう。さて御歸りのお土産にはわざと羽田へ買ひにやつた寶珠形の大煎餅、奥州八戸から取りよせた春駒、三笠焼の猪口に、明三稻荷の繪馬と、おまけに御供物の稻荷餅が一折、これを下てズラリくと、好い心地に山内を歩いて、遂に中身を抜かれなかつたなどは、よくよくお稻荷様の御加護あればこそさ。電車に乗る時夕刊を買つたら、ヤレ廢税案の、コンミツションの問題の、ブレーキが何うの、ヘルマンが斯うのと、世間はやつぱり騒がしい様だ。などよ眼を圓くした時、はじめて大人の自分に復つた。

(大正三年)

旅のいろく

面白かつた事

左様ですな面白かつたといふのは、私が京都の日出新聞に居た時です。今から十五六年も前で、東京から来た尾崎、中村(雪後)、江見、大橋(乙羽)と吉野へ行つた事があるのです。「花の旅」といふので日出新聞に紀行を書きましたかね、此の時は氣の合つた友達同志ばかりではあるし、お互に年は若し、責任の無い連中だつたから實に面白かつたです。是が其の當時の寫眞ですよ、それがね此の連中の内で三人死んでるんで、今でも時々其時の事を思ひ出しては、此度は君の番だよなどと、江見と話し合ふですがね、全く其の時の事を考へると、古昔の感に堪へんですよ。

恐ろしかつた事

別に恐ろしいと思つた事はありませんね。恐ろしいやうな旅はしないからでせうが……斯ういふ事があつたです。餘程古い事ですがね、嘗つて保津川を下つた事があつたです。水も随分増して居たし、餘り心地よくなかつた處へ、丁度私が行つた一と月以前に、同じ此保津川を樂隊の大連が下つて、出水の爲に船が覆つて十何人といふもの溺死したことがあるのです。此邊が左様ですよと船頭にはれた時には、頗る心細かつたですな。處へもつて來て、水の引いた岩の間に、其樂隊の帽が一つ挟まつて居たのを見付けた時には、一船皆戦慄しましたね。先づ恐ろしい事は斯んな位な處です。

好い景色

これは標準問題で、なか／＼むづかしいですな。初めての時には非常に好いと

思つた處も、二度目には左程に思はないことが度々あるですよ。一體私は景色を感ずる方ぢやないので、吉野なども詰らぬ處だといつて吐られた位です。松島も二度行きましたが、そんなに好いとも思はなかつたですが、只二度目に行つた時に鯛島とかいひましたよ、其處から全景を見た時には、いやなかく好いと思ひましたね。宮島へも行きましたが一寸好つたですな。一番好きなのは奈良です最初私が奈良へ行つたのは、前お話しした「花の旅」の時でしたが、今でも、あの春日の社内を追遙すると、實に何ともいへぬ好い心持がするのです。總て名所とか何とか聞いて行つた處は左様でなくて、却つて思ひも奇らぬ處に好い景色を見出すものですよ。外國では處が變つてるだけに、随分變つた景色を見ました。伯林から汽車で一時間ばかりの處に、ワンゼイといふ湖があるのですが、此處が實に好かつたですな。之も意外だつたので、好く感じたのでしやう。それから獨逸から歸る時でした、印度洋を通つた時でした。其の夕暮の雲の具合が實に何ともいへず好かつたです。米齋君と一緒に夕方になると始終甲板へ出て見ましたがね、

空は澄んで居て、全く間色といふものがなく、海は一面紺青色で、一望遮るものがない處へ、種々の形をした、佛畫に見るやうな雲の横たはる景色は、實に壯麗で雄大な感じがしましたよ。

旨かつた事

食物は不味いと思つた事は度々あるのですが、美味いと思つたものは別にありませんね。腹のへつた時は何でも美味いです。ハ、ハ、ハ、左様ですね、之は餘程以前の事ですが、琵琶湖畔の膳所に坂本屋といふ料理屋があります。此處で例の源五郎鮎の鮓を食はせますがね。之が馬鹿に美味かつたです。今食つたら何うかわかりませんよ。それから獨逸へ行く時でした、外國船ではあるし、西洋料理に飽き切つて居た時に、香港の領事の上野君に招かれて、妻君の長崎料理を食はせられた事があります。此時は非常に渴望して居た時であり、元來日本に居ても美味かるべき筈の長崎料理でしたから、實に美味かつたです。

困つた事

私は一體困るやうな旅は爲ない流義なので。だから人は貴族的だとか何とかいふけれども、何も保養に歩くのに、然う求めて困しむ必要もあるまいと思ふのです。従つて大して困難した事もありませんが、嘗つて京都から歸る時でした、暴風雨の爲に線路に故障が出来て、國府津迄の切符しか賣らなかつたから、仕方なしに其切符を買つて乗り込んだですが、汽車は何時通するかわからず、國府津で愚圖々々するでもないと思つて、静岡で一旦降りて、停車場前の宿屋に泊ることにしました。處が随分不注意な話ですが、鞆を開け放したまゝ顔を洗ひに行つて、それから飯を食つてる時に、汽車が通じたといふ報知が来たから、それぢや一刻も早く立たうといふので、勘定しやうとすると鞆の中へ入て置いた紙入がない。さア困つたです。併し驛口に幾らか残つて居たものだから、拂だけは何うにか濟ましたが残る處僅か二三十錢——いやもつと少なかつたかも知れませんが、——國

府津から東京迄の汽車賃が無いのです。其時は電報で取り寄せるなどといふ智慧も出ず、何うしやうかと種々考へてる内に、不圖氣が付いたのは、京都から預かつて来た者が荷物の中に入つて居る。之は香奠か何かで、確かに金だ。此場合委託金費消も何も有つたものでないといふので、驛長に掛け合つて荷物切符は國府津迄だつたけれども、どうせ東京迄行くものだからといふので、荷物は東京で受取る事にしてあつたのです。それを先づ受取て、驛員の面前で之を解いて、例の預り物の封を切ると、正に金一圓あつた。之で漸く汽車賃を拂つて歸宅しましたかね、年は若かつたし、大に困りましたよ。

嬉しかつた事

私が十八歳の初旅の時です。京都から姫路まで行つての歸り道は只一人。行きには神戸迄船で行つて暈つて困つたから、歸りには四日市から船に乗ることにしました。もう此時には淋しくて心細くて堪らなくなつて居た處へ、確か桑名の

宿屋だつたと思ふが、不圖廊下で語を掛けたが原で、石川縣の中學校から東京の高等學校へ轉任するといふ人に——名前は忘れたが——知己になつて、此の人が非常に親切に世話をしてくれたので、其の時の嬉しさは未だ忘れることは出来な
い。それから船に乗り込むと、小崎牧師の母堂と令弟に會つて、一層心丈夫になりました。其外嬉しかつたのは獨逸へ初めて着いた時と、歸朝の折初めて日本の山を見た時でした。(明治四十年)

「思ひ出」の思ひ出

文藝協會の第五回公演に、マイヤア、フェルステル氏の「アルト、ハイデルベルヒ」が、松居松葉君の手で、「思ひ出」と意譯されて、登場される事となつたに就いては、多少僕も關係が無いではない。即ち僕は、その書卸の當時、彼地で三度まで見たと云ふのが縁で、その登場に大いに賛成もすれば、また稽古にも一寸立會つた位だ。

初め松居君が、まだその脚本を翻譯中、それが英譯からであつたので、一日僕の所へ、獨逸の原文と讀み合せに來た事がある。其時に出た問題だが、一體この外題は、何と譯したら可いのだらうと云ふには、誰も一寸頭を傾けた。文字通りに直譯すれば「古ハイデルベルヒ」と云ふべしだ。だが、それでは意味が通じない。こゝではアルトと云ふ字が、古だの舊だの意味ではなく、寧ろ「嗚呼」とか

「例の」とか云ふ意で、更に適切に云へば、「あゝ懐かしの」と解すべきものだ。尤も僕は、先年歸朝の後間もなく、京都の日出新聞紙上に、これを翻案した時には、「あゝ京都」とやつてのけた。京都ならこれで納まりもしやうが、原文通りハイデルベルヒと云ふ、片假名が七字も列んでは、一寸ウンザリ来るだらう。

そこで松居君は、前の二十世紀の時の筆法で、これを「思ひ出」としやうと云ふ。「思ひ出」如何にもそれは適切だが、又一面から云ふと、ちと平凡過る嫌もある。で、僕も、聊か頭を傾けて居たが、さていよく本にもなり、舞臺にも上る事になつて見ると、「思ひ出」必しも悪くない。いでやその「思ひ出」に對して、更に僕の思ひ出を書くのも、また後日の思ひ出にもならうか。

元來このアルト、ハイデルベルヒは、主人公がカアル、ハインリヒと云つて、ダブツた名前である如く、著者もマイヤア、フェルステルと云ふ、ダブツた名前のある人だ。これを妙に通がつて、單に「ハイデルベルヒ」と呼んだり、「フェルステル」と許り覺えて居るのは間違つて居る。

で、その著者は、北獨逸ハンノバアの人で、この外に二三篇の創作もあるが、殆んど顧みられずに居たのに、ふとこれを公にしたら、忽ち世間から歓迎されて稀有の流行兒に成つたのだ。

尤も最初は小説で出したので、次いで之が脚本に編まれ、舞臺に上ることになつたのは、千九百〇一年の冬の事であつた。

丁度その頃から、僕は伯林に住んで居たが、好きな道で、毎日注意して見る新聞の芝居案内に、他の座では、シルラア、シエクスピアの時代物や、イブセン、ズーダアマンの世話物を、彼れ是れと取りかへ引かへ出して居るのに、伯林座の欄には、いつも「アルト、ハイデルベルヒ」と許り記されて、そしてそれが、第百何十何回などよ、小書きが添へてあるでは無いか。

その中にまた雜報欄を見ると、昨夜伯林座で、「アルト、ハイデルベルヒ」の、第百何十何回行があつたが、相變らずの大入であつたと、今更らしく藝評迄してある。今までは外題にも著者にも、一向馴染の無い爲めに、聊か馬鹿にして居た形であ

つたが、かう興行が續けられて、而も評判の落ちない所を見ると、何所かに好い所があるに相違無いと、食指坐ろに動いて、其晩直ぐに覗いて見た。

すると、案の定面白い。そしてその面白さが、シルラア物やイブセン物とは、全く變つた方面にある。例へば彼等がコニアクかうオーツカとすれば、是はシトロンかサイダアである。前者をビフテキか、マヨネーズとすれば、後者はオムレツかコロツクの如きものだ。藝術上から云つたなら、元より低級の物には相違無いが、それで居て相應に笑はされもすれば、泣かされもし、一晚心地好く楽しむ事が出来て、後に何もモタレル物が無い。

當時又レッシング座では、有名なゾルマ夫人が、得意のノラを出して居た。それも僕は二度まで見たが、その時受けた感興とは、元より變つた點に於て、矢張り同じ程度の興味を感じたのである。

他國人の僕でさへ、然かく興味を感じたのも、獨逸人としてあれを見て、一層面白がつたのも無理は無い。それは彼等の國自慢なる、學生氣質が遺憾なく

發揮されて居る許りでなく、何でもその頃、それに似通つた事實が、何所かの王族中にあつたもので、その間の消息を知るものには、更に感興が深かつたらしい。

さうで無くてさへ、あつた様な經驗は、誰にも多少はあり勝ちのものだ。して見ると、彼のカアル、ハインリヒが、ハイデルベルヒに對する「思ひ出」によつて、見物の多數の者が、それへの思ひ出に驅られる事になる。其點は丁度我邦の「不如歸」や「金色夜叉」が、大多數の同情者を吸収し得て、毎度大入を取ると、異曲同巧ではあるまいか。

天機を洩して恐入るが、僕は三度目の見物には、日頃から懸念にして居たある少女を、わざと誘つて行つたものだ。そしてその少女は、あの三幕目と五幕目で、さかんにハンケチを擽つて居た。して見ると又女性の方にも、斯した「思ひ出」に泣く者が、また少くないらしい。

殊に當時のケイテイ役者は、タリヤンスキイと云ふ女優であつたが、それが滅

法チャールディングな女で、ひどく見物を動かしたものだ。但しその科は、今度のすま子よりも、やゝ長けて居たと覺えて居る。

實際すま子嬢のケイティは、五幕目で殆んどタリヤンスキイの壘を摩して居たが、二、三幕目の所では、邪氣無さ過ぎた様だ。随つてその科は、やゝもすると日本の小娘になつてしまつたが、それが却つて日本の観客には、より多くの同情を引き得たらう。

あの王子様に捧けると云つて、花束を持ち出して來た所は、やがて當年のオフイリヤをも思ひ出させるが、あの時から見ると、殆んど別人かと思はれる、此人の進境には驚かざるを得ない。

土肥君のカアル、ハインリヒは、不思議に書卸のワルデンに似て居た。寸のつまつた顔の輪廓から、その中脊の所までが、正に當年を思出させた。あれで着附に今少し注意が足りて居たら、天晴れ本場へも出られるだらう。

ユットナア博士は、伯林座ではコーランドが勤めて居たが、あの時は東儀君の

より、今少し若作りであつた様に思ふ。然しあの作りとしては、東儀君のあの科白に、殆んど點の打ち所を知らない。

佐々木君は國務卿で成功して居た代りに、ビルツでは失敗して居た。どうもこの人の藝風は、學生殊に獨逸學生には、分別らし過ぎて適はしくない。

これから見ると、森君のデトレープ伯は、侍従長と同點であるが、それも彼地で見たピットシヨウに比べると、所謂學生氣分に於て、殘念ながら角力に成り兼ねた。

ルツツの役は加藤君が、原書の寫眞を型に取つたと見えて、殆んど遺憾無く發展して居たが、只あの白まはしの、時々活辯式になるのが、此人にして此病だと思ふ。ある人が又此人を見て、新派の佐藤(歳三)を思ひ出し、また山本(嘉市)を思ひ出して居たが、僕もそれには同感した一人だ。

倉橋君はクラアマンに於て、神妙に成功して居たが、西原君がリユーダアの役で熱心な丈却て脱線して居たのは、甚だお氣の毒に感じる。

その他舞臺面から云ふと、宮殿ではたしかに日本のがお角末だったが、リユー
 ダア方の二階では、今度の方がよほど立派に見えた。

若し夫れリユーダア方の庭の道具は、今一息工夫を凝らしてほしかつた。又學
 生コーアの帽子やバンドが、どうも本物に成つて居なかつたのは、日本では仕方
 が無いとしても、獨逸人の目にはをさまらなかつたらう。

それからあの五幕目だが、あの場でハインツとクイタイとが、さかんに抱き合
 つてはキスをするが、あれも彼地で見ると、ちつとも目ざはりに成らなかつたの
 に、日本の舞臺では、何だかちと鼻に付く様だ。原文に忠なる點は諒とすべきだ
 が、多少省略して、むしろ他の科にかへた方が、却つて感興を深からしめはしま
 いか。

などキスを氣にする様になつたのも、自分のハイカラさが退化した證據か。
 イヤ、全くもう十年にもなると、二年位の洋行のメツキは、殆んど剝落してしま
 ふ。所へ今度あの劇を見せられて、單にあの劇に付てどなく、他の種々な思ひ出

を、ゆくりなく味はひ得た事を、その譯者と演者と共に、茲でお禮を申して置く。

(大正二年)

時計の行方

僕の寢室の一隅に柱がある。その柱に折釘が一本打つてある。その釘に状挿がかけてある。そして又、僕が夜が更けて歸つて來ると、いきなりその釘に時計をかけて、やがて床に入るのが常に成つて居る。

この週の月曜日の朝の事だ。例の如く支度をして出勤かけて、その釘の時計を取らうとすると、何うしたものか其所に無い。はてな？ 昨夜たしかに掛けておいた筈だがと、不審に思ひながら、念の爲め他の所も探して見たが、一向見當らない。ハテ面妖なと思ふと、やがて思ひ出された事は、昨夜の電車の混んで居た事だ。

有樂座のハネから、銀座の四丁目に乗つて、それから品川の停車場前まで、約半分は車掌臺に立つて居た。さては彼の時やられたナと、思ふと胡散な事無い

でも無い。

御懷中物御用心は、幾度か車掌の口から繰返された。其都度用心をしなかつたでも無かつたが、八ツ山下で例の飛降りをやつた時、果して時計があつたか無かつたか、……否、家へ歸つてから、果して時計を例の所へ掛けたか何うか、……さア、これが甚だ心元無く成つて來た。

殊に昨日着て居た脊廣は、前の明きの廣い奴だ。しかも自分は、ボタンを皆かけるのが嫌ひだ。時計はチョッキの左の衣囊に入れて、鎖の端の輪を、右の衣囊にかけるのが癖だ。これは取らうと云ふ奴に取つては、鼻前にブラ下げられた様なものだ。

それやこれやを考へると、いよくやられたに相違無いらしい。

「それだから御用心をなさらないといけませんと云ふのに……」

と、妻は今更らしくその輕忽を警める、何と云はれても仕方が無い。全く自分の不注意の罰だ。

が、更に又考へて見ると、あの時計は父の遺品だ。鎖は洋行をする時に、友人達から祝つてくれた品だ。また鎖につけてあつた、小さな寫眞入は、伯林を立つ時贈られた、ある人のこれも仇ならぬ記念品。——として自分の懐中を痛めた物では無い代りに、また錢を出した物よりは、一つとして惜からぬ物は無い。

返すくも残念だ。残念と云ふよりは馬鹿々々しい。實にその日一日は、出勤はしても仕事の手に着かず、又しても時計の事、昨夜の事が頭に浮んで、筆もろくに進まなかつた。

で、歸途には高輪分署へでも、已に届けておかうかと思つた。が、又無念極まる事には、時計の番號も覚えて無い。餘儀なく其儘歸つて、今一度よく調べて見やうと思つて。

家へ歸つてから、妻に今一度探せと云ふ。妻は已に如才無く、留守中にも十分探して見たが、一向見當たらぬ以上は、全く昨夜お取られなすつたのです。届けるなら早い方がよろしいと云ふ。

この上は是非に及ばず、いよく其手續に及ばうとした。何だか甚だ氣が利かないが、さて黙つても居られない事だ。で、獨り口小言を云ひ乍ら、已に筆と紙を命じ様とすると、其所へ歸つて来たのは、

例の悪戯盛りの三ーだ。三ー！ 此奴時々書齋へ来て、いろくな物を持ち出す奴だ。まさかとは思ふが、それも念の爲だ。「三ー！ お前父さんの時計を知らんか？」と訊くと、「知つてます」と極めて無造作だ。

「知つてる？ ぢやア何處にある」筆を置いて斯う訊くと、三ーはもう立つて行つて、例の釘にかけてある、狀挿の底をさぐつて、「これでしよう？」と、更に無造作！

昨夜拘られたと思つた時計は、まるで名人の手品の様に、狀挿の中から出たては無いか。

僕は意外に打たれながら、「何だつてそんな所へ入れた？」と聞くと、

「今朝學校へ行く時見て、あとで釘へかけようと思つたら、下へ落ちてしまつた

耳



目

んです。」

と、辯解は簡單明瞭！

妻は笑ひ出す。

僕も吹き出さずに居られない。

妻の膝

へ来た三一は只眼を圓くして、

「何うしたの？くく？」（明治四十一年）

按摩物語

僕は按摩が大好きだ。但し自分がするのではない、してもらふのだから断つて置く。其癖何も何所が凝つてたまらないと云ふのではない、只もんだり、さすつたり、時にはくすぐつたりしてもらふのが好きなのだ。其代りどこをくすぐられつつ、ゲラ／＼笑つてたまらないなんて事はない。只何となく好い心地なので、ニコ／＼おめで度くなつてしまふのだ。で、その御機嫌にまかせて、今迄やらせた按摩の中から、話になる奴を御紹介して見やう。

一 盲人の側見

僕がはじめて此味を占めたのは、まだ十六七の頃だつたらう。其頃僕の家に出

入の按摩に、立悦と云ふのがあつた。爺さんで、圓坊主で、芝居に出て来る何の市其儘だが、人相は一寸品の好い方で、而も少しは見えたらしい。

所が本人、その少し見えるのが大得意で、お約束の杖は持ちながら、時々それを抱へる様にして歩いて居た。

ある日僕の所へ療治に來た時、自分に出された茶を半分飲んだまゝ置き忘れて、やがてそれに躓ついた。と、本人驚いて、自分の手拭で疊を拭きながら、

「へよ、飛んだ角笄を致しました。うっかり側見をしてたもんですから。」

だとさ。盲人の側見は振つてるぢやないか。

二 大圓鬚の女按摩

やはり其時分、光江と云ふ女按摩が來て居た。黒ぢやんこの婆さんで、子供が見たらおびえさうな顔をして居るが、その弟子に何江とか云ふのは、目の潰れぶりも醜からず、師匠に似ない容貌好しで、年齢もまだ三十前だつた。

所が此何江、ふとある男に引かよると、師匠の勘氣も何のその、按摩の分際であらう事か、白粉もつける、紅をさす、遂にはデコデコの大圓鬚まで結ふに至つて、其男と夫婦になつたのださうだ。

云ふまでもなく其男は色魔で、かうして一年ほど一緒に成つて居る間に、すっかり當人の臍栗をまきあげ、とう／＼圓裸にして逃げてしまつた。

「それだから云はない事か」と、師匠に散々油を取られた揚句、歸參が叶つて再び療治に來る頃には、髪は散斬の撫でつけ、顔の雀斑もむき出しであつた。

三 實驗の怪談

杉浦先生の塾に居る時分の事、江見君と一緒に、房州の北條に遊んだ事がある。其時呼んだ按摩は、年は若いかなかくの話上手で、而も實驗した幽霊話を、シンミリ二タくさり許り聞かせてくれた。

一つは四谷怪談の燒直しの様で、月竝丈に恐くも無かつたが、他の一つは自分

の修行中の朋輩が脚氣衝心で死んで時、師匠の所へ暇乞に來た。その時の幽霊が、盲人同士で姿こそ見えね、聲丈はありくと聞えたと云ふ、如何にも有りさうな事を、神に迫つて話されたので、物凄さが一層つよく、やがて按摩が歸つてからも、此方は互ひに顔見合はせて、

「君、便所へ行かないか！」

と、誘はずには行かれなくなつてしまつた。

四 猛烈な荒療治

初めて汽車の通じた當座、硯友社の連中十人許りで、小金井に花見に行つた歸途に、府中で泊つた事がある。

其時も寝る前に、按摩を呼んでやらせる事になつた。所が其按摩と云ふのが、頗る非常の猛烈な奴で、まづ襷掛に二の腕まであらはし、人の體を捉へると、まるで柔術でも取るやうに、エイ、ヤツと云ふ掛聲をしては、前へ押たり、後へ引

いたり、手をねぢ揚るやうにしたり、足を折りかへす様にしたり、イヤ恐ろしい荒療治だ。

流儀を聞けば、長崎眞流！

「ナニ、これではけりやア利きやアしません。」

と、鼻息の程も凄まじいので、例の江見、武内、桂舟、及僕なんぞ云ふ、按摩好きの連中も、爲めにへトくに惱まされ、負嫌ひの尾崎（紅葉）なども、

「ア、下は、もう可い〜！」

五 腕も價も第一流

按摩には、なか〜高慢なのがある。

ある年京都の澤文で呼んだのは、按摩と云ふと御機嫌の悪さうな、女マツサージ師であつて、無論目の見える三十女、産婆か女教師とでも云ひさうな扮装、言葉づかひもいかつく、時には英語も交らうと云ふもの。

「ホテルへは始終私が入り出しますが、西洋人の療治よりは、日本人の方が骨が折れます。それにあの常陸山さんには、京都中の按摩が、みんな匙を投げてしまひましたが、私が参つて、漸く御氣に入りました。なアに、これも力許りぢやいけません、やつぱり術でございますから。」

と、大分味噌をあけられたが、それ丈腕も、價も好かつた。

六 美人の女房

同じ京都の萬屋に泊つた時は、二十五六の屈竟の若者が来た。飛白の衣服に、胸高の兵児帯、どう見ても玄關番の書生さんと云ふ風だ。

で、もませながら話して見ると、それも其筈、此男は四國の者で、中學も五年までやつた時、不圖した事から眼を病ひ、一年許り苦んだ揚句、とう／＼潰れてしまつたのだと云ふ。

所がこの男、潰れる迄は非常に煩悶したが、いよ／＼潰れたら度胸が据り、此

上はむしろ按摩になつて、腕かぎり稼ぎに稼いで、せめて金でも溜めてやれと、親族は音楽でもと云ふのを斥け、盲啞學校で此道を修行して、卒業後は京都へ來、ある大按摩の家の塾頭に成つた。

身上啞を聞く中に、盲人心理も研究されて、僕は少からず興味を感じたが、又試みに、

「それでまだ此上に、何か慾望と云ふものがあるかネ。」

と聞いたら、彼は笑ひながら、

「さやう、金も大分出來ましたから、此上は美人の女房が欲しう御座います。」

と云ふ。

「盲人に美人は無駄ぢやないか。」

と云ふと、

「へよへよ、却つて盲人は贅澤なもんです。」

と、例には壺坂の話などはじめた。此奴なか／＼話せるわと思つたが、歸つてか

ら女中に聞いたたら、彼は已に結婚して居て、而も女房は美人だと云ふ。
なんだ、すつかりのろけられて居たのだ。

七 藪も此道

これも京での話だ。

木屋町の涼臺で、女共を相手にしながら、來合はせた按摩にもませたなどは、
我乍らお大盡様だと得意がったが、女の中にも話せる奴が居て、僕に旅中の句な
ぞ求めた。

有り合せた料紙に、二つ三つ書き取らせるべく、僕はもませながら口ずさむと、
按摩はそれを聞いて居たが、

『へへへ、旦那もなか／＼おやりになりますネ。』

と、はじめて口を開いたが、此奴も此道が話せると見えた。

八 白紙の富士山

按摩で名高いのは、今はもう死んでしまつたが、塔の澤の眞谷だらう。昔は深
川の髪結だつたと云ふ、生粹の江戸ツ子丈に、一寸座敷の藝も出來て、何の客に
も可愛がられて居た。

實にこの男には、種々の逸話が残つて居るが、中でも罪な事をしたと思つたの
は、福住で寺崎（廣業）君と落合つた時の事だ。

眞谷は目こそ見えね、妙に書畫を好いたもので、寺崎君の來たを幸ひ、是非何
か書いてくれと云ふ。

寺崎君は例の一杯機嫌で、

『よし、ソレ書いてやるぞ。ソレ、これだ、富士の山だ。』

と、云ひながら只の白紙を出した。僕等も側に居合はせて、

『イヤ實に上出來／＼、三保の松原が殊に妙だ。』

なぞと、盛んに合槌を打つたものだから、本人嬉し喜んで、その白紙を押しいただいて歸つた。が、暫くすると眞青になつて、

「先生ひどいぢやありませんか。盲人だと思つて馬鹿になすつて、こりやア只の白紙ですぜ。」

と、帳場で聞いて來たと見えて、えらい見脈でねぢ込んで來た。

が、元よりそれは一時の串戯、本物は其間に書いて置いて、

「さア、今度こそ大丈夫だ。」

と、廣業君手づから絹地を渡したが、今度は鼻の側へ持つて行つて、墨の香を嗅ぐまでは、直ぐには禮を云はなかつた。

九 全く蛇に怖ぢず

罪と云へば、塔の澤には又風仙と云ふのが居る。

これも中年からの盲人で、感は極めて悪いが、咽喉は一寸好い。それで客の療

治をしながら、聞き覺えの端唄や清元や、時には段物をさらつて聞かせる。

ある時の事だ、吉住の小三郎、小三藏が、一の湯の奥二階に居た、僕の友人の所へ來合はせた。

其所へ風仙も呼ばれたが、元より此方は爪を隠して居るから、かうした大家が鼻の先に居やうとは、當人少しも感付かない。

で、居合はせた藝妓の絲で、得意になつていろいろな物を出す。果は人の悪い客が、

「一つ、勸進帳を！」

とやると、彼も藝妓も心得顔に、「旅の衣」をはじめではないか。

小三郎はをかしさをこらへながら、

「うまい〜。」

と油をかける。

盲人蛇におぢすとは、全くかう云ふ圖を云ふのだらう。

翌る日僕を療治に來た時、客の正體を云つて聞かせたら、

「そいつアひどい目に會ひましたなア。」

と、彼は思はず頭を叩いたが、

「それにしても藝妓の奴等、目がありながら解らねえんですかねエ。」

と。なる程是は一言も無い所だ。

十 宿直醫と水滸傳豪傑

先年滿洲をまはつた時も、やはり例の道樂は止まなかつた。

大連で呼んだ按摩は、髻をはやした立派な紳士で、白い手術衣を着て居る工合は、どうしても病院の當直醫と云ふ風だつたが、本溪湖で來た按摩は、水滸傳に出て來さうな六尺豊の支那人で、而も日本風の巧みな療治風りには、少からず感心した。

「何所で習つたのか？」

と聞くと、日本語も自在に、

「長崎で修行しました」

と云ふ。

長崎と云へば思ひ出す、府中の宿の荒療治、若しこの大男があゝの流儀だつたら、正に僕は揉み殺されたらうにと、むかしの可笑さが今更に笑まれた。

十一 正體は産婆

越後の柏崎に泊つた時、例の通り註文すると、やがて現はれたのは、先刻宴席に出て居た女が、白いエプロン様の物をかけて來たまでだ。

僕はやゝ氣の毒になつて、

「姐さん、すまないネ。」

とやると、

「イエ、私はこの方が本職なので御座います。先刻はほんのお手傳ひをして居り

ましたので……」

『では、やつぱり按摩さんかエ?』

『へい。いそ、實は産婆で御座いますが、マツサーヂも按摩も致しますので……』とぬかす。

十二 俳人心月

つい此頃、備後の鞆に遊んだ時、夜は俳席にも招かれて出た。

其席に一人の盲人が居つた。この人がまた巧い句を吐く。

其中別席で泊る事になつて、僕が例の所望をすると、其盲人遮つて、

『モシ、私でよろしければ……』と來た。

それは尙妙だと云ふので、それからまれながら俳を談じ、俳を談じながらもまれたが、その盲人の話によると、それはある時福山の宿で、京都の花の本の療治

をしてから、つひに此道に入つたのだと云ふ。俳號も花の本からもらつた心月、盲人にはふさはしい名ではないか。

十三 將棊の御相手

成田へ行つた時はをかしかつた。

たしか鹿島からの歸りで、新聞記者連中二十人近くもあつたが、例の大野屋の奥へ通されると、皆按摩が呼び度くなつた。

女中は『幾人呼びませう?』と聞く。『何して此方は大連なんだから、一人や二人ぢや追付かない、かまはんから成田中の按摩を總揚げにしろ』などよ大きく出て見たが、聞けば六十人居ると云ふので、口をつほめて今のを取り消し、改めて十二人丈呼ぶ事にした。

すると其召集に應じて、來るは來るは、男あんな、女あんな、爺婆、年増、新造、小僧、それが皆盲人で、本つぶれや半つぶれや、飛出したのや、くほんだのやが、

「なんだ、まるで此方がお相手だ」と、三木君こぼすまい事か

ズラリと其所に列んだ所は、正に百鬼夜行の體。

其癖それは午後の事で、早速午睡の枕をならべ、其所でも此所でも療治がはじまつたが、其中の一人の男按摩は、揉みながら將棋をさすと云ふのが面白さに、それを特に迎へたのは、萬朝の三木愛花君だつた。

で、按摩は三木君の肩をもむ。三木君は前に將棋盤をおいて、按摩の分もならべてやり、「ソレ飛車の頭とか『ソレ、金が右へよつた』など口で云ひながら、按摩の分まで駒を運ばせてやる。

所が按摩先生、時々手を止めては考へ込むので、其度に療治が御留守になる。

「オイ、按摩さん、休んぢやこまるぜ。」と云ふと、

「イヤ、旦那ア私より強いから、とても療治しながらはいけません。ドレ、真劍に願ひませう。」

と肩をはなして腕組をしながら、尙切りに勝負を争ふ。

また按摩物語

又しても按摩の噂、讀者の肩の凝らない程度で、もう一度書いて見る。蓋し地震には揺りかへし、按摩にも揉みかへしありと知りたまへ。

一 あぶなく瘤の市

新潟の積善組合の林理事の東道で、新潟縣下に舌栗毛を驅つたのは、大正二年の初夏であつた。

其時加茂町に泊まつた晩の事だ。宵の間の講演會がすむと、有志の面々宿へと押しかけて来て、今度は揮毫攻めの一段と成つた。小は短冊、雅帖から、大は半截額面に、例の悪筆を揮ふほどに、捏ねるほどに、夜も初更は疾うに過ぎてしまつた。

これで十二分の凝りを覺えたから、後は例の按摩の段になると、同行の林君も、「見物でも大分肩が張つたから、今夜は私もやつてもらひ度い。按摩さん後に頼むよ。」と、云ひながら隣の床に入つた。

私は此方の間で揉ませて居たが、かう成ればもう極樂世界、何しろ心地が滅法好いので、揉まれながらも辿る夢路に、何時其手を離されたか知らなかつた。すると、唐突に次の間で、消魂ましい聲がした。

「ひやア……ダ、ダ、誰だ？くく？」

つゞいてこれも慌しく、

「ワ、私、按摩、按摩で御座います。」と云ふ。

僕も半分寝ほけながら、急いで夜具をはねのけて見ると、林君は半分裸體になつて、床の上に立ちはだかり、其前には盲人の坊主頭か、おろくししながら萎んで

居る。

何の事かと聞いたならば、これは林君の寝て居た所を、だしぬけに按摩が手をかけたので、折角頼んで置いたのも忘れ、てつきり枕探しの盗人と、思ひ込んでの騒ぎとわかつた。

林君は氣の毒がる。僕は可笑しがらる。按摩は眞顔で辯解する。若し此座敷が離れでなかつたら、店から心張棒が飛んで来て、可哀さうにこの按摩、瘤の市と改名させられたらう。

二 すみませんが呼鈴を

それは客の寢惚けだが、今度は按摩の戸惑と云ふのを……

此春上州の富岡へ行つた時の事だ。町一番の料理屋兼業の旅館に、特に宿を取つておかれたのはよいが、座敷は奥の新築で、常は減多に使はない所らしかつた。呼んだ按摩も此家には馴染だが、此座敷にはつい馴れないと云ふので、来る時に

も女中に手を引かれて来た位、戻りにはまた呼鈴を鳴らして、手引の者を呼ぶ筈なのが、ついうとく寢込んでしまつて、僕が願をしてやらなかつたのだ。

仕方が無しに按摩先生、獨りで手さぐりにやつたものと見える。所がかんも悪いのだらう、忽ち方角をあやまつて、彼方へぶつかり此方へ行き當り、果は進退谷まつて、又元の座敷へ這ひ戻つた。その物音に目を覺ました僕は、スハ胡麻の蠅御参んなれと、昔なら枕刀へ手のかよる所を、空拳を握つたまゝで、そつと頭をあけて見ると、何の事だ先刻の坊主。

「按摩さんか！ 何うしたんだ？」

「旦那すみませんが、一寸呼鈴をお願い申します。」

三 女按摩の女嫌ひ

常磐線の湯本温泉へ、一寸中食に降りた事がある。

只ある宿屋の三階に湯上りの體をごろりとやつて見たが、まだ汽車迄の時間が

あるので、早速按摩を呼びにやると、同伴にも同じ好者があつて、やがて二人現はれたのは、揃ひも揃つて女按摩の、而も少々は見える奴だ。

例によつて話に成ると、

「ア、私達も人間と生れた甲斐にやア、一生涯に一度位は、湯治場で暢氣にあそんで、按摩を取らせて見たいもんだが。」

と云ふ。

「ハ、ゝ、そんなに私達が羨ましいかネ？」

と聞くと、

「なアにね、旦那方を揉むにやア何とも思はないがネ、女のお客へ出る時にやア、何時もさう思ひますよ。」

と、一人が云ふと又一人が、

「全くさうだよ。中にも若い女がなんかで、腰がだるいの何のと云はれると、小癢にさはつて成らないねエ。」

と、果は憤慨の指先に力を入れる。

「オイ、お手やはらかに願はうぜ。此方は野郎だ、而も老人だよ。」

四 旦那は行司さん

信州の上田へ行つたのは、つい此九月の初めだつた。丁度次の日から大阪角力がかよると云ふので、同じ宿の觀水樓には、力士が多勢泊つて居た。宵には廣間で開かれた、有志者の小宴に招かれ、それから奥の三階へ戻つて、床に入つて居る所へ、兼て頼んで置いたのが來た。

來たのは分別らしい四十男、無論杉山流の目は利かない方、やがて僕を揉みはじめたが、

「明日はお天氣にしたいもんですなア。」

と云ふから、

「さうだよ。何卒ねエ。」

と、生返辭をして居ると、先方では又口を次いで、何所から来て、何所へ行くの何時まで此所に居ると聞く。これにも好い加減に答へておいたが、僕も又好奇に、

「按摩さん！私は何と見えるネ？」

と、一つ判断させて見る氣になつた。

すると按摩は心得顔に、小首さへ傾けず、

「旦那は行司さんでせう。」

と、一廉圖星をさした氣で居る。

なる程晝間力士を揉んだ手で、僕の細腰をつかんで見ては、かう云ふ鑑定も無理は無い。

が、流石にウンとも點頭かれないから、

「いよえ、私はそんな者ぢやない。筆より重い物は持たない商賣さ。」

「ハ、ー、それぢやア書記さんだネ。」

さりとは御挨拶！

「まアそんなものだ」も苦しかつた。

五 目よりも利かぬ耳

これも同じ信州で、而もつい此間の話。松本の少年會へ行つた序に、淺間の温泉の西石川に泊まつたら、丁度すいて居たので、三階の頂邊に寝かされた。

これでは按摩に氣の毒だと云ふと、いよや、少しは見えるのが居ますと云ふので、それを頼む事になると、やがて女中の案内もまたず、五十許りのが現はれた。なるほど少しは見えると見えて、脱いだ羽織を下で疊んで、隅の方にもやんと置き、それから僕の肩へと來た。昨夜の汽車で寢足りない癖に、宵の茶に浮かされたか、珍らしく眠氣が來ない。

そこで暫時相手にしてやらうと、そろ／＼話の種を蒔くが、先方は手先を動かす許りで、ちつともそれを拾はうとしない。

夜具の袖でも邪魔になるのだらうと、故らに少し首を伸ばして、

「ねエ按摩さん！」

と、少し聲を高めると、

「ひやア……」

と頓狂な返事をして、グツと顔をよせて来た。さては先生耳が遠いなと、思ふから又聲を張ると、其度に顔をよせて来るが、話の要領は少しも得ない。

果はその顔を寄せられる度に、脂肪の臭氣が鼻を衝くので、流石の僕も敗亡して、再び夜具の襟を深めた。

六親の因果

頓狂な聲と云へば、潮來の宿で呼んだ奴の聲は、未だに耳について居る。イヤ、耳許りではない、目についてるのは其顔だ。

眼は一方が半開きになつて、而もそれに星が入つて居る。鼻は左右の孔が不揃

で、口は不作法な亂杭齒、燈火の前ではちと恐入る代物だが、それでも腕は相應にやる。

「お前は此の土地の者かエ？」

試みに聞いて見ると、

「ナニ、直き近在の者ですが、此商賣に成つてから、仕方が無しに此方へ流れ込んでますのさ。」

と、聲こそ變なれ、言葉には何所か江戸ツ子らしい所もある。

「ぢやア中年からだネ。」

「へい、二十一の年です。」

「そりやア困つたらう。何うして潰れたんだ？」

「やつぱり毒が入つたんで。狂人になるか眼が潰れるかつて所でしたが、やつとまア眼だけですみしました。」

「それぢやア道樂の罰とでも云ふのか。」と云ひかけるのを遮つて、